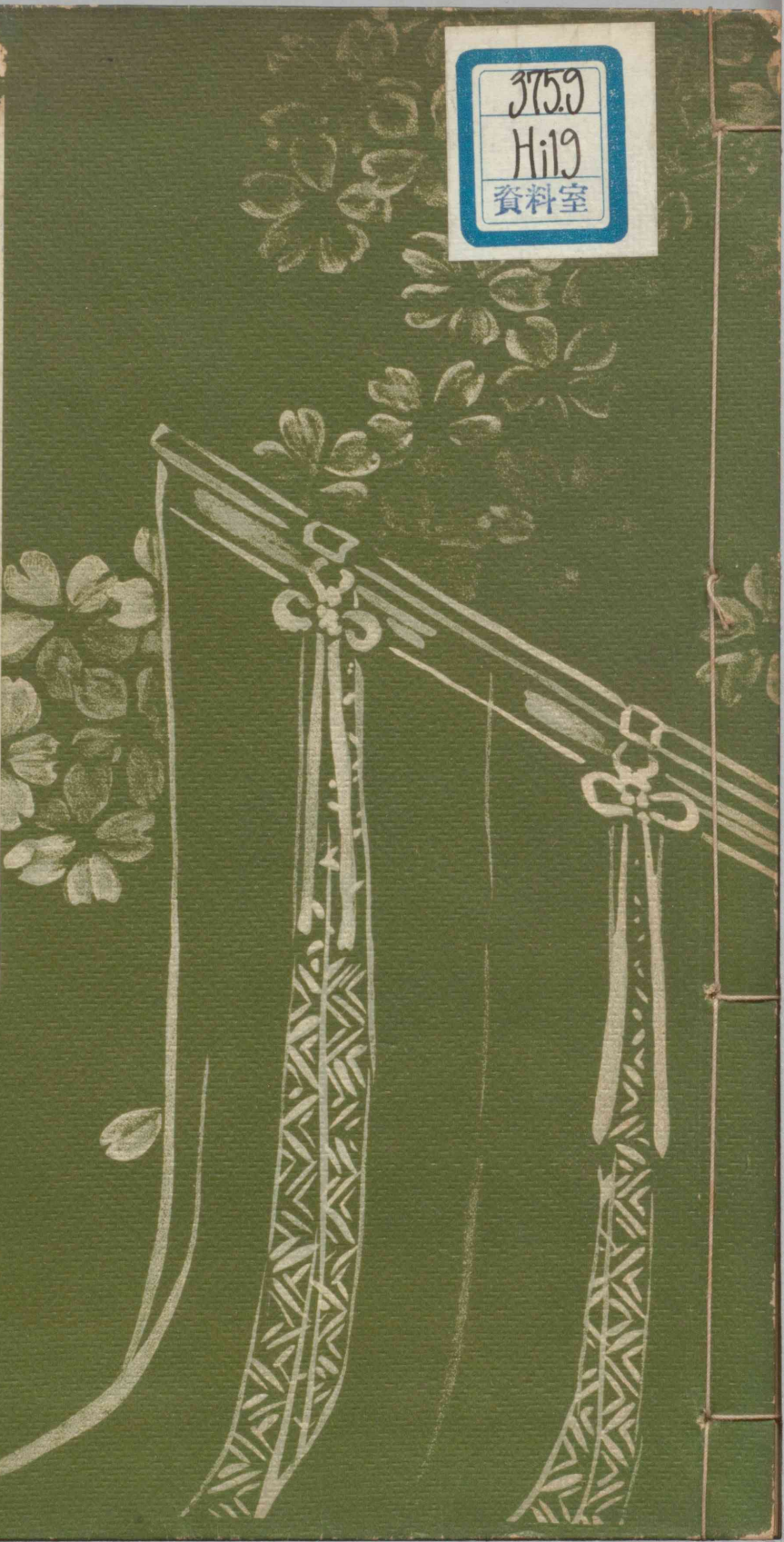


375.9  
Hi19  
資料室

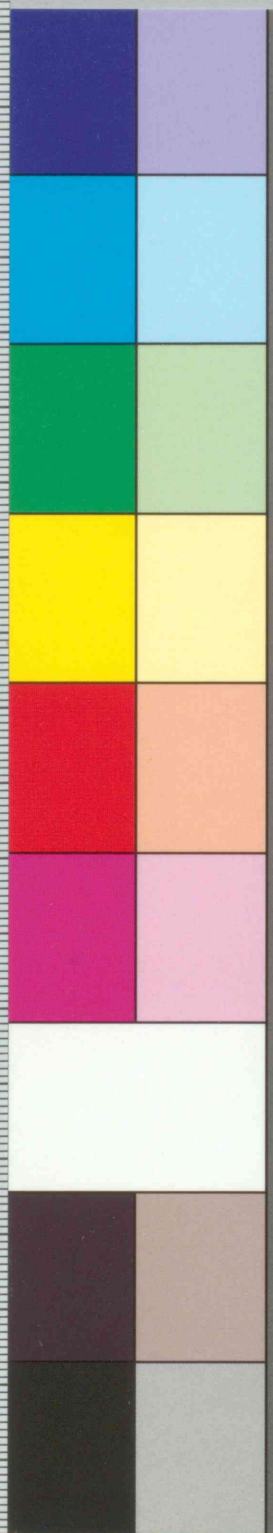
女子新讀本  
卷二



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Kodak Color Control Patches



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42223  
教科書文庫

4  
810  
42-1926  
200030  
1724

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

895.9  
Hi 19

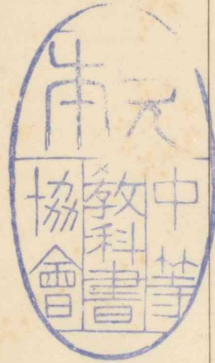
文部省検定済

大正十五年十月二十一日 高等女学校國語教科書

東京帝國大學教授久松潜一編



# 女子新讀本



東京 至文堂

## 女子新讀本 卷二

### 目次

- 一 皇太子妃殿下……………大島義脩……………一
- 二 いり目……………高濱虚子……………九
- 三 野 菊……………島木赤彦……………二
- 四 村の秋……………徳富蘆花……………三
- 五 鞍馬の火祭……………志賀直哉……………七
- 六 双蝶のわかれ(韻文)……………北村透谷……………七
- 七 紅葉の湖畔……………大和田建樹……………元

目次

八	蟲の聲……………	沼波瓊音…三七
九	渡鳥……………	吉江孤雁…四一
一〇	手と機械……………	河上肇…四六
一一	樂地……………	幸田露伴…五三
一二	童心……………	北原白秋…五五
一三	彦根……………	田山花袋…六二
一四	誤解され易い國民性(一)……………	佐々木指月…六七
一五	誤解され易い國民性(二)……………	佐々木指月…七〇
一六	忠君……………	芳賀矢一…七五
一七	桃山御陵に詣でて……………	八波則吉…八二
一八	青葉の笛(一)……………	萩野由之…八七

一九	青葉の笛(二)……………	萩野由之…九七
二〇	ちんちん千鳥(童謡)……………	北原白秋…九八
二一	薬とり(童謡)……………	西條八十…一〇〇
二二	旅人となりて……………	吉田絃二郎…一〇二
二三	大井川……………	千葉龜雄…一〇九
二四	元日の歌(韻文)……………	與謝野晶子…一一五
二五	北國春信(一)(口語書牘)……………	相馬御風…一二七
二六	北國春信(二)……………	相馬御風…一三三
二七	開墾小屋(韻文)……………	白鳥省吾…一三六
二八	若草山……………	大類伸…一三〇
二九	七面鳥……………	北原白秋…一三三

目次終

一 「いつしかに」……………相馬御風…二六

二 青磁の鉢……………熊田葦城…二四一

三 雛祭の日……………與謝野晶子…二四五

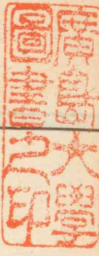
四 鍵と障子……………河上肇…二五三

五 汝の母より……………姉崎正治…二五七

六 笑……………高島平三郎…二六六

七 小善の實行……………(東京朝日新聞)…二六六

八 修善寺行……………吉田絃二郎…二七三



# 女子新讀本 卷二

文學士 久松潜一編

## 一 皇太子妃殿下

日本の女子教育は漸次向上しつゝある。其の女子教育界に在つても、皇太子妃殿下の受けさせられた御教育の程度は非常に高く、妃殿下程の高い教育を受けられた御方は、皇族方の中にあらせられても殆ど稀で、又極めて特殊な少数の人々を除いては、日本の一般の女性の中にも、其の儔が

無いと云ふことは、誠に有難い事で有ると拜される。

妃殿下の、東宮妃冊立に關する最初の御沙汰の有つたのは、大正七年一月十四日の事で、殿下芳紀正に十六歳の御時

である。それから間も無



皇太子妃殿下

く、殿下には學習院中等科第三學年を御退學になり、麴町一番町の久邇宮邸内に新しく設けられた御學

問所に於て、普通の女學校程度の教育の上に、更に三箇年の高等教育を受けさせられ、尙其の外に數多くの特別講義を御聽取り遊ばされた。

右のやうな次第で、學問上の御素養としては餘程根柢のある、しつかりしたものがお有りであるから、今後其の御基礎の上に延びて行かせられる殿下の御將來を想像し申しあげる時、如何にも頼もしく拜察せられるのである。

殿下には天資御聰明に渡らせられ、御頭腦は眞に名刀の如く、はつきりと澄切つていらせられる。此の事は獨り御學業の上ばかりでは無く、御平常の御生活の上にも現れてゐて、何事によらず、よく要點を捕へ急所を攫ませられると同時に、更に細かい隅々にまでも御注意の届かせられる事は、全く感歎し奉る外は無いのである。

畢竟殿下には、細かい所までも御注意が届かせられると

いふ點では、女性特有の長所を持たせられると同時に、彼の要點・急所を逸するといふやうな事は、決してお有り遊ばされないとはいふことになるのである。

お寫眞などを拜しても窺はれるやうに、殿下はお姿が端麗にいらせられる上に、御心ばへが優に氣高くいらせられ、まことに冒し難い品位を具へさせられてお出でになるが、さういふ氣高い中に、優しさやなつかしさが満ちて、始終にこにことしてお出でになり、つんと遊ばしたり、むつとなされるやうな御様子は、ついぞお見せなされた事などは、只の一度もお有りにならないのである。

侍女や御學友に對しても非常に優しく、第一御同情が

お深い事は驚くばかりで、どんな事があつても、決して他人の困るやうな事は遊ばされない。御學友に何か一寸都合があり、早くお暇を戴きたいといふやうな事でもあると、殿下の方から先に其の事をお言ひ出しになり、決してお忘れになつたりするやうな事は無い。そして講義をお聴きになつていらせられる時でも、御學友の鉛筆でも折れたりするのを御覽になられると、すぐ御自分の物を御與へになるなど、何事にもよくお氣がお付きになる。

殿下の御健康は勝れてお宜しく、御體格も大層しつかりしてお出でなされる。御運動も御熱心で有れば、お力も非常にお強い。

學習院御在學中は、強ひて何か不足を申し上げると、御丈が低くお有りなされたといふ事であつたさうであるが、今は並の女性よりも遙かにお高くなつていらせられるから、全く批點の打ち處が無いと申し上げなければならぬ。

御運動は薙刀もおやりになれば、テニスもお好きで、なかなか御熱心におやりなされるが、御趣味も至つてお廣くいらせられ、繪もお上手であれば、和歌も御堪能で、ピアノも頗る妙境に入つていらせられる。殊に御聲の美しいことは驚くばかりで、女性的な澄渡つた美しい殿下の御聲と、あの男性的な大きな皇太子殿下の御聲とは、誠に御立派なよい對照であると拜される。

殿下には、侍女や御學友に對して、御同情がお厚くおいて遊ばすばかりではなく、小さいお子様方に對しても、誠に御親切で御親戚のお子様でもお出でになられると、何くれとそれはそれはよくお世話を遊ばされる。そして其のお惠深いお世話は、小鳥の上にも及ぼさせられ、鳩のお世話などは、涙のこぼれるほど御深切に遊ばされる。

鳩の世話は、なかく辛抱強い人でなければ出來ず、普通の人でも、容易ならぬ骨折とされて居るものである。それにも拘らず、殿下は誠に御辛抱強く、長い間御可愛がりになられたものであるから、鳩の方でも、殿下にはよくお懐き申すやうになつたとのことである。徳禽獸に及ぶと申し上げ上

ぐべきであらう。  
久邇宮家は、御一家の御睦みが深く、一家御團欒の御様子は、拜し奉るだに畏多い程であつて、御和樂の空氣が、御家庭の隅々までも漂ひ、しかも其の中には嚴格なお躰がお有りになると云ふ事である。

つまり殿下の天稟の御美點と、此の家庭の御薰陶と、そして御學問並びに實地御見學の御修養との三拍子が十分に揃つて、今日のあの麗しい玉のやうな殿下とおなりなされたので、今後に於ては、ますます輝かしいお光をお放ちなされる事であらうと拜されるのである。

かやうに殿下におかせられては、お體も宜しければ、お徳

\*  
帝室博物館長  
前女子學習院長

も高く、しかもすぐれた御見識、御知識をお備へになつて居られるのであるから、皇太子妃殿下として、實に欽仰し奉るべき御立派なお方であらせられるのである。  
(天島義脩)

## 二 いろり日

富士山の頂に夕焼の雲がある。頂を起點にして、墨がはねたやうになつてゐる。一抹の雲が赤く焼けてゐる。焼けてゐるといふよりも焦げてゐる、黒光りに焦げてゐる。其の雲の縁の片々の雲が燃え立つて、光になつて、唯黄色く、白い光になつて、其の赤く焼けてゐる雲の縁をさへべりに取つてゐるやうに見える。



此の一抹の雲のほかには、其の邊には雲が無い。富士山の頂は正しい形をして、眞青な夕暮の空に、薄墨色にくつきりと浮き出たやうになつてゐる。さうして、此の一なすりの雲が頂から煙でも吐いてゐるやうに、片方にたなびいてゐるほかには全く其の邊には雲は無い。

が、それよりずつと離れた處に雲がある。富士山の頂の一抹の雲を、一寸筆の先ではねたものとすれば、其の筆勢が餘つたかの如く、大空の眞直中に濃い長い一線を劃して雲がある。其の雲も眞赤に焼けてゐる。

それから空一面の亂雲だ。頭上見渡す限り一面の亂雲だ。其の雲も眞赤に焼けてゐる。

富士山の背中に今太陽は没して行く。其の光が眞先に富士山頂の雲を射て、それから大空の眞直中にある濃い長い雲に及び、それからは大空一面にはびこつてゐる亂雲に及んで、今や天地が眞赤に焼けて焦げて爛れてゐるのだ。さうだ、汽車の窓の人々の顔も赤く輝いてゐる。手にしてゐる書物の面まで赤く輝いてゐる。況て、窓外の稲田などは、黄熟してゐる稲が眞黄色に光つてゐる。稲田中を走つてゐる一つの街道も黄色く光り輝いてゐる。

夕焼だ。偉大なる秋の夕焼の景色だ。

(高濱虚子)

### 三 野菊

野菊の花を見てゐると、  
 水の流れる音がする。  
 野菊の原のくぼたみに  
 泉が湧いて居りました。  
 野菊の花を見てゐると、  
 こほろぎの鳴く聲がする。  
 野菊の原の草の根に  
 蟲がかくれて住みました。  
 野菊の花を見てゐたら、

\*歌人  
 本名窪田俊彦  
 大正十五年没

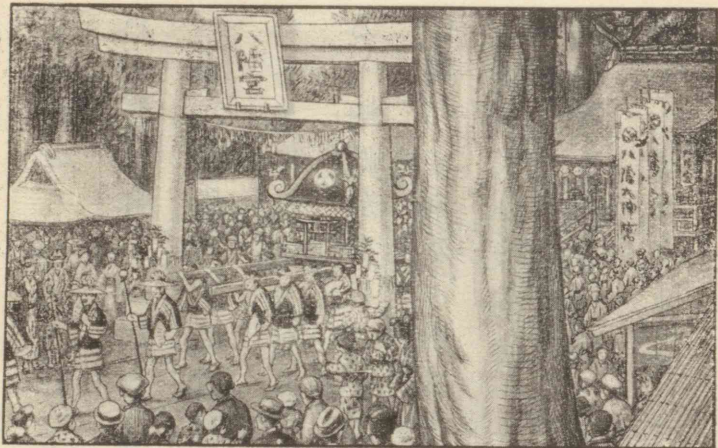
雲が通つて行きました。  
 空に浮かんで行く雲の  
 影が花野に動きます。  
 蟲と泉の音のする  
 野菊の原はしんとして、  
 雲の通つた大空は  
 いよ／＼青くなりました。  
 (島木赤彦)

### 四 村の秋

九月は農家の祭月、大事な交際季節である。風の心配も

どりやらからうやら通り越して、先づ收穫の見込がつくと、何處の村でも祭をやる。木戸無用、千客萬來の芝居、お神樂、それが出来なければ、せん方なしのお神酒祭。

祭となれば、どんな家でも強飯を蒸す、煮染を拵へる、饅頭を打つ、甘酒を造つて他村の親類縁者を招く。東京に縁づいた娘も、子を抱き亭主や縁者を連れて来る。今日は此方のお神樂で、平生は眞白な鳥の糞だらけの鎮守の宮も、眞黒になるほど人が寄つて、安小間物屋、駄菓子屋、鮎屋、おてん屋、水菓子屋などの店が出る。神樂は村の能狂言、神職が家元で、村の器用な若者等が神樂師をする。無口で大兵な鐵さんが、氣輕に太鼓を打つたり、氣輕な龜さんが、髻髮蓬々とし



田舎の鎮守祭

た面を被つて、眞面目に舞臺に立ちはだかる。「あ、ありや龜さんだよまあ」と、可笑い盛りのお島がくつゝ笑ふ。今日、自家の祭の酒に酔うた仁右衛門さんが、明日は透綾の羽織でも引つけて、寸志の紙包を懐中して、隣字の芝居へ出かける。毎日近所で顔を合せて居ながら、畑の畔の立話にも、「今日は」と、抑、天氣の挨拶から、ゆるくと始める田舎氣質で、仁右衛門さんと、隣字の幹事の忠五郎さんとの間に

は、芝居の科白の受取り、渡しよろしくと云ふ挨拶が、鄭重に交換される。互に主になつたり客になつたり、呼びつ呼ばれつ、祭は村の親睦會だ。

十月は稻の秋、地は黄金の穂波に明るく照り渡る。早稻から米になつて行く。性急に百舌鳥が鳴く。日が短くなる。蜻蛉が夕日の空に數限りもなく亂れる。柿が好い色に照つて来る。ある寒い朝。ふと見ると、富士の北の一角に白いものが見える。雨でも降つたあとの冷たい朝には、霜がある。

十月は雨の月だ。雨が續いたあとは、雑木林に茸が立つ。野良住事をせぬ腰の曲つた爺さんや、赤兒を背負つたお春

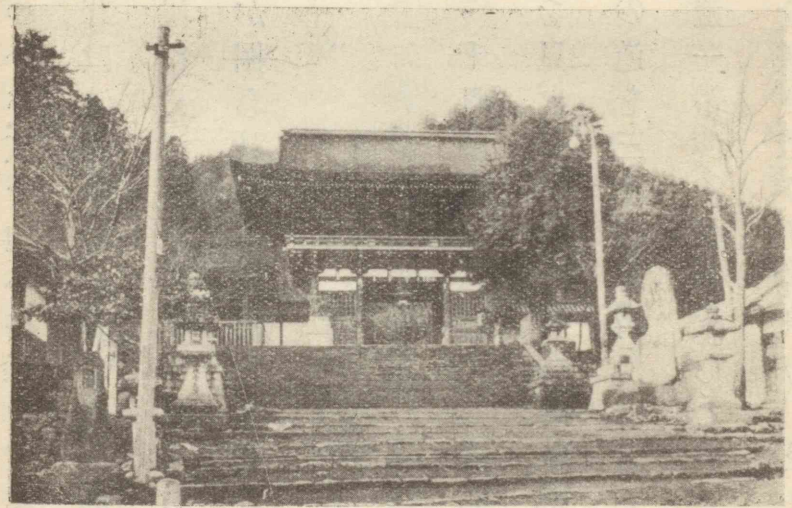
\*名は健次郎  
文學者

つ子が、箆を抱へて採りに来る。楡茸、濕地茸、稀には紅茸、初茸は滅多になく、多いのが油坊主と云ふ茸だ。一雨毎に氣は冷えて行く。田も林も日にくく色が着いて行く。甘藷が掘られて、續續都へ運ばれる。

\*徳富蘆花

### 五 鞍馬の火祭

十月中旬過、私は二三人の友だちと、鞍馬へ火祭といふのを見に行つた。日の暮京都を出て、北へ北へいくらか登りの道を三里ほど行くと、遠く山の峽がほんのり明るく、その邊一帶薄く烟の立ちこめてゐるのが眺められた。苔の香を嗅ぎながら、冷えくとした山氣を浴びて行くと、この奥



鞍馬寺二王門及及び救使門

にさういふ夜の祭があることが不思議に感ぜられた。子供づれ、女づれの見物人が提燈をさげて行く。それを時々自動車か前の森や山の根に強い光を射つけながら追ひぬいて行く。山の方からは五位鷲が啼きながら飛んで来る。そして行くほどに、幽かなくすぶり臭い匂がして来た。

町では家ごと軒前に、といつても通りが狭いので道の真中を、一列に焚火が並んでゐた。大きな木の根や、人の背丈ほどある木切で三方から圍ひ、その中に燃えてゐるのが、何か岩間の火を見るやうな一種の感じを起させた。焚火の町を出ぬけると、稍廣い場所に出た。幅廣い石段があつて、その上に丹塗の大きな門があつた。廣場の兩側は一杯の見物人で、その中を下帯一つに肩だけちよつとしたものを着て、手甲・脚絆・草鞋がけに身を固めた向ふ鉢巻の若者たちが、柴を束ねて藤蔓で巻いた大きな松明を擔いで「最澄祭禮」——これはほんたうではないが、ちよつとさう聴きなされる掛聲をしながら、兩足を踏張り、右へ左へよろけ



鞍馬の火祭の其一

つつ、上手に中心を取つて歩いてゐる。或者はよろける風をして、わざと群集の前へ火を突きつけたり、或者は家の軒下にそれを擔ぎこんだりした。火の燃え方が弱くなり、自分の肩も苦しくなると、一抱ほどあるその松明を不意に肩から外し、どさりと勢よく地面へ投下す。同時に藤蔓がはぢけて柴は開き、火は非常な勢で燃上る。若者は汗を拭き、息を入れてゐるが、今度は又別の肩にそれを擔ぐ。それも一

人ではとても上げられず、傍の人から助けてもらふのである。

この廣場を抜け、先の通りへ入ると、そこにはもう焚火はなく、今の松明を擔いだ連中が「最澄祭禮」と聞える掛聲をして、狭い所を行き交ふ。子供は年相應な小さい松明をわざと重さうによるけながら擔ぎ廻る。町全體が薄く烟り、氣持のいいぬくもりが感ぜられる。

星の多い澄み渡つた秋空の下で、かういふ火祭を見る心持は特別だつた。一筋の低い軒並の裏は、すぐ深い溪流になつてゐて、そして他方はまた高い山になつてゐるといふやうな所では、いくら賑はつてゐるといつても、その賑やか

さの中には山の夜の静けさが浸透つてゐた。これが都會のあの騒がしい祭より知らぬ者には、大變よかつた。そして人々も一體に眞面目だつた。「最澄祭禮」この掛聲の外には大聲を出すものもなく、酒に酔ひしれた者も見かけられなかつた。しかもそれはすべて男だけの祭である。或所で裸體の男が軒下の小さな急流に坐つて、眼を閉ぢ、手を合はせ、長いこと何か口の中で唱へてゐた。清いつめたさうな水が、乳のあたりを波打ちながら流れてゐた。大きな定紋のついた、變に暗い提燈を持つた女の兒と、無地の麻帷子を展げて持つた女が軒下に立つて、その男のあがるのを待つてゐた。漸く唱言を終へると男は立つて、流の端

に揃へてあつた下駄を穿いた。帷子を持つた女が濡れた體に黙つてそれを着せかけた。男は提燈を持たず、下駄を曳きずつて、すぐ暗い土間の中へはいつて行つた。これはこれから山の神輿を擔ぎに出る男だといふ。かういふ連中が間もなく廣場の石段の下に大勢集つた。そこには二本の太い竹に高く注連繩しほなひが張り渡してあつて、その注連繩を松明の火で焼き切つてからでなければ、誰もその石段を



鞍馬の火祭の其の二

登ることが出来ないとのことだ。しかし繩は三間よりもつと高い所にあつて、松明を立てても、その火はなかなかそこまではとどきさうにない。澤山の松明がその下に集められる。その邊一帶、火事の時のやうに明るく、一緒に早くそのの焼き切れるのを仰向いて望んでゐる群集の顔を赤く照らし出してゐた。

やがて漸く火が移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分れ落ちると、眞先に抜刀を振りかざした男が、非常な勢で石段を駈登つて行つた。すぐ群集は叫聲をあげながらそれに續いた。しかし山の門にもう一つ、それは低く、ちやうど人の丈よりちよつと高くくらゐに第二の注連繩が張つ

てある。先に立つた抜刀の男は、それを振りかざしたまま駈抜ける。注連繩は自然に切られる。そして群集は坂路を奥の院までそのまま駈登るのである。

「どうだい、もう歸らうか」と私は友を顧みていつた。

「お旅でやるお神樂を見て行かうよ」。

神樂といふのは、四五人で擔ぐやうな大きな松明をいくつか、神樂の囃子に合はせて、神輿のまはりを擔ぎ廻るのである。

「大概もうわかつたぢやないか」。

「何時だ。二時半か」時計を見ながら友だちがいつた。

「これで京都へ歸ると、ちやうど夜が明けるかも知れませ



んよ。ともう一人の友だちがいつた。焚火の町では、来る時岩間の火のやうに見えてゐたのが、今は盛んに燃えてゐた。町を出ると急に山らしい冷氣が感ぜられた。私たちは時々振返つて、明るい山の峽を見た。道は往きより近く思はれ、下りて樂でもあつたが、やはり皆は段々疲れて無口になつた。

「睡くてかなはぬ」と一人がいつた。

「僕が腕を組んで行つて上げるから、眠りながら行き給へ。」もう一人がさういつて、二人は腕を組んで歩いた。

京都へ入る頃は實際友だちがいつたやうに、叡山の後からしらじらと明けて來た。

（志賀直哉）

文\*  
士

### 六 雙蝶のわかれ

ひとつの枝に雙つの蝶

羽を收めてやすらへり。

露の重荷に下垂るゝ、

草は思ひに沈むめり。

秋の無情に身を責むる、

花は愁ひに色褪せぬ。

言はず語らぬ蝶ふたつ、

齊しく起ちて舞ひ行けり。

うしろを見れば野は寂し、  
 前に向へば風寒し。  
 過ぎにし春は夢なれど、  
 迷ひ行方は何處ぞや。  
 同じ恨みの蝶ふたつ。  
 重げに見ゆる四つの翼。  
 雙び飛びてもひえわたる、  
 秋のつるぎの怖ろしや。  
 雄も雌も共にたゆたひて  
 もと來し方へ情れ行く。

\*名は門太郎  
 文學者  
 明治二十七年歿

\*木曾義仲の部將  
 墓は近江石山驛の  
 西方數町に在る  
 \*琵琶湖を源とする

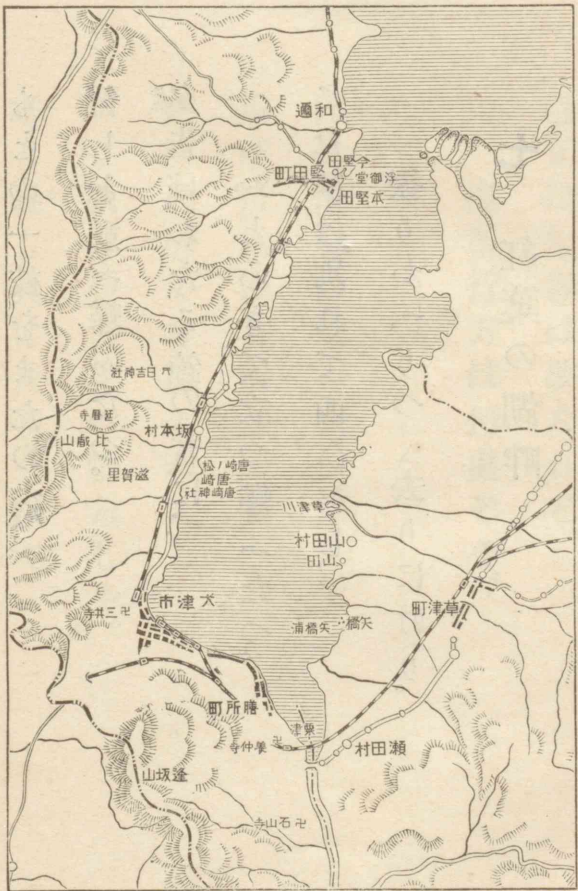
七 紅葉の湖畔

もとの一枝をまたの宿  
 暫しと憩ふ蝶ふたつ。  
 夕告ゆふげわたる鐘の音に、  
 おどろきて立つ蝶ふたつ。  
 こたびは別れて西ひがし、  
 振りかへりつゝ去りにけり。

\*北村透谷

\*今井兼平の墓を右に見つゝ、粟津の松原を  
 行き過ぐれば、石山道は勢田川の南岸に沿ひて  
 盡きたり。左には漕ぎ下

し漕ぎ上す舟の姿、右には染め始め染め終る秋の色に、目も暇あらざるにはや寺の前に出てたり。門を入れば、見上ぐ



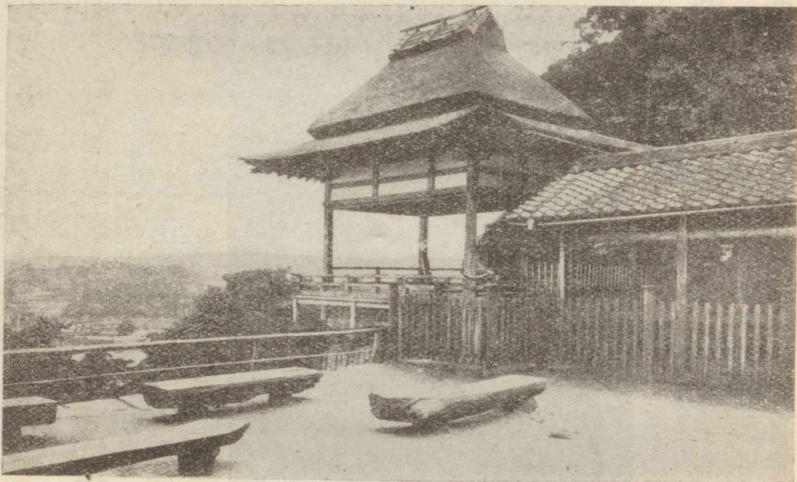
琵琶湖畔の地圖

るかぎり悉く紅葉にて、山を焼き天を焦す。身を屈めて樹

蔭の落葉を拾ひ集め、ポケットにをさめて石段を登れば、正

紫式部が湖水に映る月を見て源氏物語を書いたと傳ふる部屋。

勢田の唐橋。



石山寺の眺望

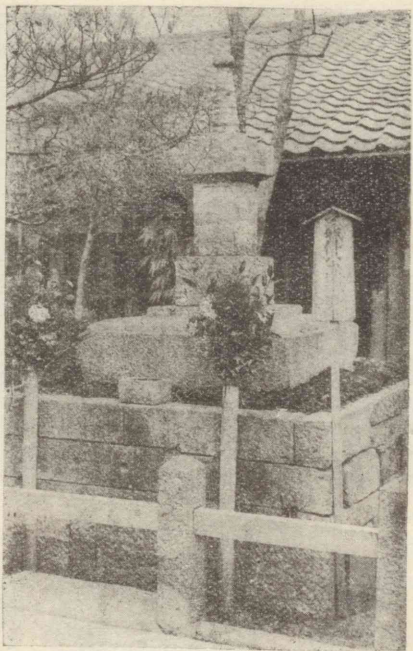
面なるが源氏の間なりと、車夫教ふ。案内乞ひて、式部が書きしといふ大般若經や、其の畫像やを觀終へて、本堂の欄干に倚りつゝ、見下せば、緑樹に交る紅、また一入なり。巡りて奥の方に出づれば、床几あり。此處より勢田川は一目に見おろさる。橋は朽ちてはてて修繕中なれば、眺望の數に入らねど、月を眞東に

\*<sup>二</sup>大津市大字馬場に  
ある  
木曾義仲

\*<sup>一</sup>園城寺  
大津市の西部にあ  
る

\*<sup>三</sup>謡曲に三井寺とい  
ふがある

待ち出でん夕べの景色想ひやらる。それより寺を出て、膳<sup>三</sup>所の町を過ぎて義仲寺に詣づ。朝日將軍の墓は二疊ほどの臺石なる五輪の塔にて、雞頭の萎れたるを花筒に残せり。



木曾義仲の墓

比叡おろしは、今も來りて苔むす石の面を拂へど、深田に乗り入れし駒は主人と共に歸る世あらず。

\*<sup>三</sup>三井寺より見渡す

湖水の景は、聞きしにまして面白し。月夜ならねど、まづ口ずさまるゝは謡<sup>三</sup>の文句なり。鐘は奥の院の右手にありて、

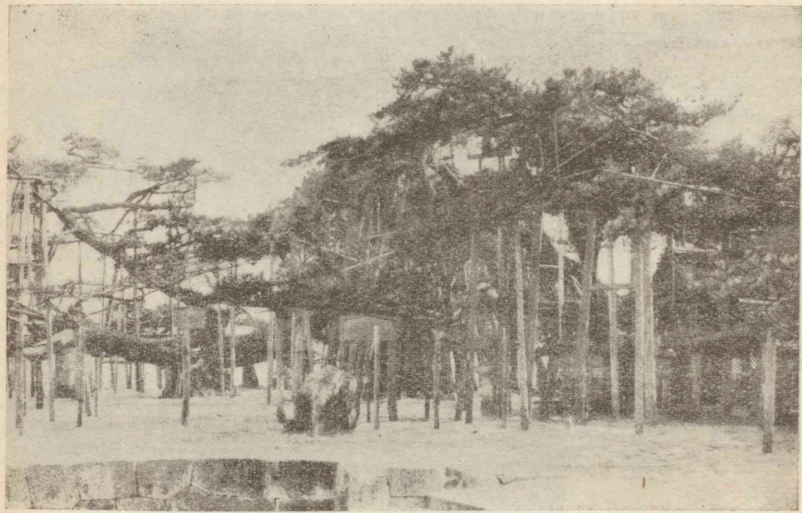
\*<sup>一</sup>唐崎の松  
大正十年枯死



三井寺(高)觀音

此の邊は紅葉まばらなり。鐘など見物して山を下れば、麓に三尾神社あり。古色蒼然たる社殿を圍める銀杏楓も尋ね漏らすべき秋にはあらず。雨ならずして唐崎を訪ふ。松<sup>三</sup>もし靈あらば、心無しとや恨むらん。されど何ぞ八景の名目に拘つて雨のみを喜ぶべき。石の大鳥居と、立ちつづける石燈籠とを措きて、黄と紅とに

近江國滋賀郡坂本  
村の西北部比叡山  
の麓にある官幣大  
社



唐崎の松

世を譲りたるは日吉神社の  
境内なり。花か、錦か。花な  
らば斯くは照らさじ。錦な  
らば斯くはにははじ。坂本  
の紅葉よしとは聞きつれど、  
これほどまでとはいかてか  
思はん。瓢を提げて行く人  
歸る人の、此處にのみ集るも  
理なり。本社は丹塗の門よ  
り内に神さび立てること尊  
けれ。金燈籠の色、こけらの

\*  
諸曲の曲名

色、おのづから参拜者をして信心肝に銘ぜしむ。拜しめぐ  
りて二の鳥居に歸れば、其處には川水清く流れて石橋あり。  
床几を並べて人の休むを待つ。此處より見れば、上なるも  
よし、下なるもよし。水さへ染め盡くして、酔へるもの人の  
みならず。林を隔てて「紅葉狩」<sup>\*</sup>諸ふ聲するは、西京などの客  
にやあらん。

「此處まで來つるに、八王子見残さんや。」と、車夫の勸むるに  
應ぜしは、途中にて高く仰ぎ見たる景色の忘れがたければ  
なり。道急なりと言へば、靴をぬぎて草履にかへ、外套を車  
夫に持たせて登りにかゝる。七八町なりと云へど、慣れぬ  
山路なれば、頗る遠くおぼゆ。二棟の社は最も高き處にあ

りて、幾星霜とも知られぬ建築、神々しさ限りなきに、風の掃き集めたる紅葉は、自然の錦を敷きて、拜殿を飾れり。此處の紅葉は最早人間界とも思はれぬ程にて、火の如く、入日の雲の如きが、天を蔽ひ、宮を守りて立ち續けるさま、目も及ばず。

山愈、高くして、琵琶湖愈、廣く、今は大津・唐崎・坂本・堅田の里まで、一幅の彩色畫を成せり。水を隔てて、堆きは鏡山、其の右手に人家の見ゆるが山田・矢走の村々。又彼の煙立つ方に遠く霞めるは伊吹山にて、伊勢の鈴鹿は其の左に少し顔を出したりなど、教へらるゝまゝに興趣盡きず、疲れし足も忘れ果てぬ。嗚呼、轉變急なる人の世に、千古の色を更め

\*近江蒲生郡

\*近江國坂田郡

\*伊勢國鈴鹿郡

\*國文學者  
明治四十三年歿

ざるは、此の水と山とあるのみ。

(天和田建樹)

### 八 蟲の聲

私は一年の中で秋が一番好きだ。「なぜ生きてゐるか。どういふ目的で生きてゐるか」と問はれれば、「秋を味はふのが生存の一つの目的だ」と答へるぐらゐに、私は秋を好ましく思ふ。私が秋に對して感ずる心持はどうかといふに、荒立つた後に來る澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に非常に靜かな落着いた心持になる。その荒立つた感情の後に來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戦争に飽きて發心した

心持にでも喩へようか。とにかく細かく、優しく、そして澄んだ感じである。

かういふ心持は、秋の風物の何物にでも現れてゐる。物の形でいへば、日光・雲・草花など、それ等のものにもこの心持は著しく現れてゐる。句でいふと木の花、觸覺に感ずるものは冷たい風、聽覺に來るものでは蟲の音、そのすべてに前に述べた秋の感じは現はれてゐるが、殊に蟲の音に最も著しく現れてゐる。

耳に觸れるものでは、春はいろ／＼な小鳥が啼くし、夏の盛りには蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春のおぼろ夜に鳴く蛙

の聲を聞く心持にも比べられるが、蛙の聲は卑俗で單調で、蟲の音ほど複雑な、優美な、そして細かな感じを起させない。その點に於て蟲の音は最優等で、前に述べた秋の感じなり味なりを一番深く現してゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでも言ふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は内的である。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向つて開くやうな氣持がする。

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴き始める。それもいい。秋に入つて月夜に鳴くのもいい。闇夜に鳴くのもよく、また聞きながら眠に入るのもよく、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早

く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それぞれ違つた情趣と味があつて、いづれもいい。殊に夜汽車にでも乗つて行くと、或淋しい驛に着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅のあはれも一入覺えられて、深い味がある。また夜の銀座の明るい賑やかな通を歩いてゐて、ちよつと細い暗い路地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋毎晩蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで蟲の音に慣れてゐた耳に、全くなんの音も入らないのに氣づく、堪らなく寂寥を覺えるものである。

(沼波瓊音)

### 九 渡 鳥

十月の下旬から十一月の中旬にかけて、渡鳥の群が東京の空の上を騒いで過ぐる事がある。

曇り日の夕方、或は雨の少し降る日など、牛込、小石川邊の高臺の森の上に、幾百ともなく群鳥が喧しい音をたてて舞ひ狂つてゐることがある。<sup>\*</sup>赤城神社の森<sup>\*</sup>築土八幡の森などは、此等の鳥の群集する場所となつてゐる。

夕方が最も好い。高い見渡しのきく丘に登つて、西の方を眺めやつて見たまへ。幾十の群鳥が輪をゑがき、線と伸び、昇りつ降りつ、一團の黑影と密集するかと思ふと、忽ち散

<sup>\*</sup>共に東京市牛込區にある社



つて、萬片の木の葉の空に舞ふが如く、曇つた空の灰色の雲を背景にして様々な行動をしてゐるのである。或時は又森の中の一本高い樅の樹の枝に二三羽の鴉が棲つてゐると、其の周圍を幾百の渡鳥が群をなして隙間も無く攻寄せゐる。或は遠く取巻き、或は近く迫り、其の羽搏きと鳴聲とで鴉を威嚇してゐる。鴉は逃げ損じた武夫の如く、攻圍軍に攻立てられて、懸命になつて枝に取縋つてゐるばかり、翼を戦めて、鳴聲すら立て得ない。

此等の渡鳥は嵐に吹きまくられてか、木の葉に包まれてか、一群又一群と都の空から消えて行つてしまふ。そして十一月の下旬になると、大方其の姿も留めない。

あゝ長驅懸軍、彼等は何處を指して行くのであらう。彼等の行く所、木の葉は空に飛び、彼等の過ぐる時、嵐は後方から追掛けて来る。雲に包まれ、嵐に打たれても、行くべき方まで行かねば止まない。一團々々群れつ散りつ次第次第に空を掠めて過ぐる。暫し立ち停まつて、其の行方を目送したまへ、海に陸に一隊又一隊、遙に遠くイエルサレムの聖地に向つて出發した十字軍の姿を思ひ浮かべずにはゐられまい。

或夕方、私は戸山の原に出て、草の深く茂つた丘の上に登り、入日の後の鈍色の雲を眺めて立つてゐた。すると不意に、けたましい音を立てて空を鳴きつれて行くものがある。

る。驚いて見上げると、幾百かの群鳥が一團となつて、空も黒くなるばかりに連なつて行くのであつた。それも私の立つてゐる丘から、さまで隔らない空の上であるから、羽音まで明らかに聞えて怖ろしい位であつた。が、ふと氣がつくと、私が立つてゐる叢の中へ、何か空からぼたん落ちたものがある。草を分けて見ると、紅の木の實が一つ落ちてゐた。今過ぎて行つた渡鳥が何處かの森から啄んで來たものを、誤つて此の草原へ落したのかと思ふと、はぐれたる木の實よ、漂泊の鳥の翼に乗つて、何處の森より來りしぞ」と問うて見たいやうな氣がした。其の實を拾つて、鳥の行方を見ると、もう其の影は次第々々に幽かになつて、人日の雲

が微かに明るい地平線に没してしまつた。

其の渡鳥が過ぎた翌日であつた。夕嵐が烈しく起つて原を吹き、森を吹き、枯草を飛ばし、僅かに残つてゐた木の實を撈り取り、雲の中から霰がたばしつて來た。「もう秋の終り、今日よりは冬の領分ぞ」といふやうに感ぜられた。私は一人、嵐に吹かれながら野路を辿つて行つた。黍殻の束ねたのが吹飛ばされ、取残された唐辛が赤く畑に漂はされてゐた。昨夕の丘に登つて見たが、只荒涼。灰色の雲が見る見る空の上にひろがつて來る。

あゝ愈、冬になつたのか。

(吉江孤雁)

\*名は喬松  
佛文學者  
早稻田大學教授

## 一〇 手と機械

我々は往々畜類を輕蔑して四足といふが、實に人類が二本の脚で直立が出来、是がため自由の手を有するに至つた事は、人類の大なる誇である。此の自由な手を有するやうになつて、始めて經濟的發達の根本動力たる道具を造り得るに至つたのである。手有ればこそ今日の人間になつたともいひ得る。それで我々は、手を以て人を代表させて、相手といひ、騎手といひ、名手といひ、或は運動の名人、殊に徒歩競争の名人さへ之を選手といふのである。

此の如く、手は人間にとつて極めて大切なものであるが、

其の手の延長されたものが道具であつて、其の道具の更に延長されたものが今日の機械である。

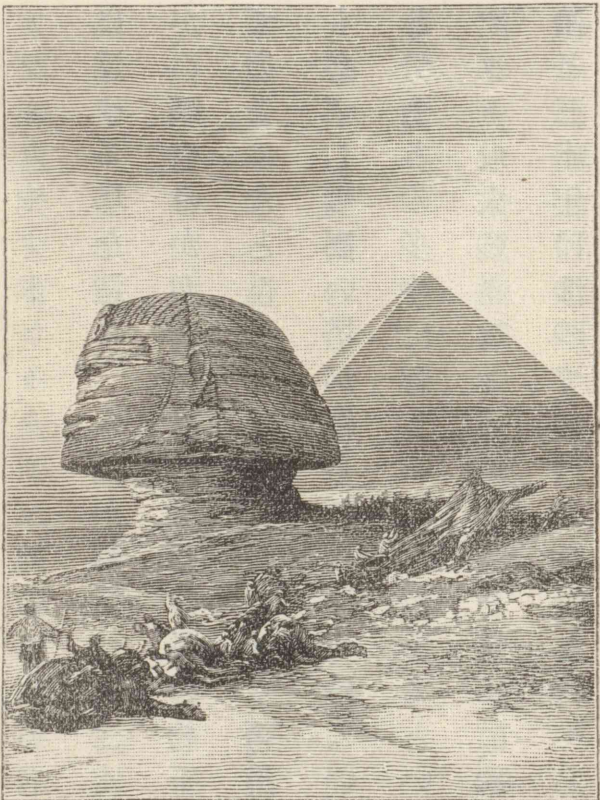
機械は、普通發動機と傳動機と道具との三つの部分より成るもので、即ち道具に加ふるに、更に其の道具を動かす爲の仕組を以てしたものである。そこで道具は單に人力の補助を爲すに過ぎぬが、機械は之と異なり、謂はば自動的の道具である。晝夜の區別なく、獨りかちくと動く時計の如きは、最も小規模な機械の一例である。既に機械は自動的である、さればこそ一度之を貨物の生産に應用すれば、我等は別に勞苦に服することなくして、容易に物資を豊富にする事が出来る。今日、西洋諸國の經濟が、實に驚くべき



エッフェル塔

發達をなした根本原因は、全く機械の應用が各方面に普及した爲である。彼等の富は斷じて勤儉貯蓄の結果のみではない。然り、刻苦精勵したのは人ではなくして機械である。

何人も、バリーに遊べば、たびはエッフェル塔上の人となる。塔の高さは無慮九百八十呎で、即ち約二町四百十



ピラミッド

餘間、塔上には、料理店・珈琲店を始め、無線電信の設備まであつて、遠くカナダに打電することが出来るといふ。併し考へやうに依つては、其の事自身は別に驚くほどの事ではない。紀元を距る遠い昔のエヂプトも、高さ四百八十呎にも達するピラミッドを造つて居るで

は無いか。否、嘗に埃及人ばかりではない、彼の白蟻でさへ  
アフリカやオーストラリヤ地方に居る者は、約二丈の高さ  
に達する塔を造る。人間から見ても二丈は驚くに足らぬ  
が、白蟻自身から云へば、彼等の身長約千倍に達する高さ  
である。たとひ簡単な道具だけでも、否、道具は全くなくと  
も、必ずしも高い塔が造られぬ譯ではない。只問題は時間  
と労力との多少に夥しい差異があるといふ事である。エ  
ヂプト最大のピラミッドを造る爲には、約十萬人の人間が、  
殆ど三十年に涉つて使役されたと傳へられて居るが、其の  
二倍以上の高さを有する巴里のエッフェル塔は、博覽會の  
餘興として、僅か三年間に落成されたものである。昔は、馬

上の急使でも、津輕から薩摩に至るには二十二三日乃至三  
十日を要したが、今は、居ながらにしてエッフェル塔上から、  
遙かに海上何千哩を距てた遠いカナダに通信することが  
出来る。畢竟機械の特徴は、勞せずして功を收めるといふ  
事にある。

思ふに、機械の發明は、人類の經濟史に於ける最大最要の  
事件である。若し人間を以て道具を製造する動物と定義  
し得るならば、所謂文明人を以て、機械を使用する人間と定  
義し得るであらう。そして、蟻や蜂が如何に勤儉貯蓄して  
も、到底道具を有する人間に及ばぬやうに、未開人も亦、如何  
に勤儉貯蓄しても、到底機械を利用してゐる文明人に及ぶ

法學博士  
經濟學者  
京都帝國大學教授

ことは出來ないのである。

(河上 肇)

### 一 樂 地

如何なる處にも樂しき地はあるべし。又如何なる處にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、空長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、快き事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕べの風には寒さに怯ゆる事もある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色無く、人畜ともに萎え屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐと云ふにもあらず。或は水仙の一輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣

を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに、罪なき話の興を涌かすをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅舎草屋にも樂しき所はあるべし。事物は凡そ只一向きならぬものなれば、いとゞ樂しからぬが中にも、樂しき所、樂しむべき所もあるべければなり。

樂しき所、樂しむべき所を見出し得ば、如何ほど窮苦不快の中に在りても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人上の人となり得ることもあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に、樂しき地を見出さんことを常に心掛けて、其の習慣を我が身に付くる時は、朝夕に心も闊く、氣もゆたかになりて、自ら人品も宜しくなり、分別も正しくな

\*群馬縣碓氷郡

り世をば楽しく過すやうにもなるべし。樂地を見出すべし、努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

昔、江州の行商人と他の國の行商人とが共に、碓氷<sup>\*</sup>の坂路を登り行きける折、夏の日の烘くるが如く熱きに、商ふ品の嵩高く重かりければ、二人共憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しみの餘り、江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし、身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり」と、溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむほどは我も亦苦しみて、斯く息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしか思はず。此

名は成行  
文學博士  
創作家

の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば數多き行商人は、皆半途より、身も憊れ、心も弱りて、歸り去るべし。其の時、我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んと思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ」と言ひけりとぞ。同じ苦難の中に在りても、よく樂地を觀るものは、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よく思ひ味はふべきなり。

\*幸田露伴

### 一一二 童 心

聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は殊に此の童心の持主であつた。斯ういふお話がある。

こひしくは  
たつてき  
ませわかや  
とはこしの  
やまもとた  
とりくた



良寛和尚自畫像

一に童男童女、二に手毬、三にお弾き、これが禪師の三好といふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供

達と遊ぶ事がまたどんなに嬉しかつたかが思はれて、ほれほれする。

その良寛様も子供達には随分馬鹿にされて、盛んに愚弄ぐぶられたり、擲ち揶かられたりしたらしい。それにも拘らず、平氣で



良寛筆

一所懸命に遊び惚れてゐた良寛様があり難い。

或時、例の通り、子供達と隠れんぼをしてゐられた。鬼になつた良寛様が目を瞑つて、「もういいよ」といふ可愛い聲を一心に待受けてゐられる。と、丁度日の暮れ時で、子供心の

しらつゆに  
みたれてき  
けるをみな  
へしつみて  
おくらむそ  
のひとなし



何かな欲しくなる時である。家々の燈がちらちらと點き出すと、子供達は急に遊を止めて、こそくと歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛様も何もうつちやらかしてある。無論、幾ら待つても「もういゝよ」といふものはない。その内に日が暮れ、長い夜が來た。さうして、たうとう夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つて、やはり同じ處に同じ姿した儘「もういゝよ」と子供が呼ぶのを待つてゐられた。

その心の素直さ、さうしてその誠の篤さ、正直さ。

それから、また或時のことである。良寛様が今度は隠れ

る事になつた。そこで見つけられては大變だといふので、早速田圃の稻叢の中にもぐり込んで、それは可愛らしいことだ、それはそれは小さくなつて、まるで二十鼠見たいに頭からすつぽりと稻藁を被つて、おどくしてゐられた。すると、子供達はまた例の通り一人残らず、こそくと歸つてしまつたのである。それを良寛様は少しも御存じない。また日が暮れて夜が來て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日が登り始めると、百姓がやつて來て、何の氣もなく、稻束を矢場にはづすと、おやつと驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてゐられる。「おや、良寛様が」といふと、慌てて、そつとしろ、そつとしろ、子供が見つける。」

その心のあどけなさ、ありがたさ。まるで子供である。

また或日のことである。その良寛様が男の兒や女の兒達とお弾きをしてゐられた。沙門良寛全傳に「禪師頗る大勝を博して賭物の熬豆を多く得」と書いてあるから、餘程の乘氣であつたらしい。丁度其の時誰かが入つて來た。そして、「おや、良寛様、なか、あなた様はお弾きがお上手で。」と褒めると、罪のないこと、良寛様はほうつと面を赤くすると、まるでおぼこ娘見たいにさも、恥づかしさうに、そつとその熬豆を膝の下に押隠したといふ。

その心の初々しさ。そのきまりのわるさ、恥づかしさは全く佛の前に子供らしく、おとなしく、身を遜る心である。尊い聖心は凡てこの童心を源にする。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からその儘である。それは何ものにも代へ難い、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ。或日父親から酷く叩かれたのでつい上目をした。そこでまた、叩かれた。「親を睨むやうな奴は躰になるぞ。」これを聞いた良寛様の榮坊は外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來ない。さあ、家内中大心配で、あちらこちらと捜し索めると、あ

る濱邊の岩の上に、悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。  
「榮坊どうした」といふと、榮坊曰く、「おらまだ蝶にならねいか」  
蝶になるといはれたので、ほんとに蝶になると思つて、一  
心に海を凝視めてふるへてゐた童心の正直さ。これこそ  
生一本といふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

\*  
名は隆吉  
詩人

聖心はこの童心を源とする。

\*  
(北原白秋)

### 一三 彦根

彦根の樂々園に来て始めて水郷らしい感じを味はつた。  
もう日暮に近かつた。それに雨さへ降り出して來た。眞

菰や蘆の繁つた向うには、湖の入江がひろびろと寂しく且  
錆びて横たはつてゐて、刮草の聲と蛙の聲が湧くやうに聞  
えてゐた。

「好いな」

かう私は獨りて言つて、一日船に車に乗り疲れた體を縁側  
の處に持つて行つた。私はかういふ町が此處に残つてゐ  
ようとは思はなかつた。封建時代そのまゝになつてゐる  
城址・天守閣、昔と少しも變らない大きな鬱蒼とした樹木、そ  
の間にをりくゝ見える城樓の白壁、それを取卷いた濠に眞  
菰や藺や蘆の叢生してゐるさまも、私に詩を思はせた。井  
伊家の別邸に往く車の上で、

年を経て蘆の葉しげり水草生ひ

蛙ほたるの濠となりなき。

といふ歌をよんだが、かうした城下町に生立つた身の、いろいろ幼時のことが思ひ出されて、父母や祖父母のことなど脈々として面影に迫つて來るのであつた。五十年も六十年も世に後れた寂しい懐かしい町、そこに住む人達の生活なども思ひやられて、大津・長濱あたりの明るい繪の様な町と好對照をなしてゐることを思つた。それにその城址の佐和山と相對してゐる形が、私に昔の英雄たちの成敗の跡を偲ばせた。しかし、もしこれが薄暮でなかつたならば、また空氣が雨意を帯びてしつとりと重くなつてゐなかつた

ならば、また城址の中が荒涼としてさびしさに閉されてゐなかつたならば、或は彦根の町そのものに對してもこれほどの印象を受けなかつたかも知れない。それに一日の遊に疲れ果てた私の心と體とが、更にそれを色濃くしたのであらう。

私のに當てられた樂々園の一室が、奥の閑雅な一室であつたことも限りなく私の心を落着かせた。刮葦は頻りに鳴く、雨が絲のやうに細く降りしきる中を、蓑笠をつけて船を漕いでゐる漁師達も昔の古い繪そのまゝであつた。

「好いな。」

かう私は繰返して言つた。

私は昨日から一周した琵琶湖のさまざまの景色を頭に浮かべた。白いペンキ塗の瀟洒たる遊覽汽船、昔の儘の瀬田の長橋、南郷の洗堰では、これから宇治に出て行く間の山中にある溪流の音と村落の平和を思つた。石山、粟津すべて曾遊の地ではあつたけれども、皆それぞれに私の興を惹いた。小舟に乗つて蜆を掬つてゐる漁師達の姿もめづらしかつた。それから私達は湖の西岸にわたつた。思ひ出すのも容易でないやうないろゝの景色、とてもこれだけをかう短時間に自分で廻つて見ることはむづかしいと思つた。

しかし、何といつても琵琶湖の美は堅田以北にあつた。

普通に八景と言はれるところはあまりに人口に膾炙しすぎたためか、それとも度々來て見て知つてゐるためか、或は實際湖が衰へ果ててしまつたためか、私の心を動かすやうな新しさと鮮かさを持つてゐなかつた。が、年來琵琶湖をそれほど好いと思つてゐなかつた私も、かうぐるりと巡遊して見るとさすがに心を動かさずにはゐられなかつた。水も深かつた従つて其の色も大津や唐崎あたりで見たやうなものではなかつた。飽くまで自然の懷に身を抱かれたやうな氣がした。

\*  
名は録彌  
小説家

\*  
(田山花袋)

### 一四 誤解され易い國民性(一)

\*北米大陸とバンク  
ーバー島との間の  
海峡

オリムピアといふは、ピューゼットサウンドの海峡を隔てて、シヤトルに向ひあつてゐる山脈地帯の名である。こゝに一軒の日本人の百姓家があつて、野菜類を作つてゐた。その隣には白人の百姓が住んでゐて、豚を畜つてゐた。

その豚が垣を毀して日本人の野菜園へはいつて、折角丹精して作つた野菜を食つた。日本人は怒つて隣家へ尻を持ち込んだ。所が白人は一向平氣なもので、それは豚のせい、私等のせいではない。あの垣はあなたの方の垣で、私の方ではないから、そんな豚に毀されるやうな垣を作つたのは、あなたの方がわるいのだ。嚴重に垣根でもこしらへ直したらよからうといふ返事をした。日本人はそのまゝ、引退つた。

日本人はぶつ／＼いひながら、垣の針金を増して修繕して、二三

日は無事に過ぎた。すると今度は豚は垣根の下を掘つてはいつて来て、價の高い植物を食べてしまつた。日本人はその豚を叩き出した。白人は怒つた。日本人は己の不注意から豚にはいられながら、人の家の畜類を打つといふのは間違つてゐる。豚の事だから青い物を見れば、地を掘つてでもはいつて行く。それを防がうと思へば石垣を作るなり、又はその青物の見えないやうな堀を立てるなりしたらよからうとどなつた。日本人は憤慨した。

すると、或夜、また豚がはいつて来て、家の周りで鼻を鳴らしてゐるのを見つけた。日本人は怨重なる豚を捕へて、之を撲殺し、近所の日本人を呼集めて之を煮て、皆食つてしまつた。之を知つた隣家の白人は驚いた。併し日本人は平氣なもので、豚の直段を拂つてやれば、それで文句はなからうと言つた。

人の家の豚を平氣で食ふやうな日本人が隣にゐては、以後どんな事をされるか知れたものぢやない。これは何とか法律の制裁を彼等に加へなければならぬと、恐を抱いた白人は、これを地方の裁判所に訴へた。

この事件に對する判事の判決は意外にも次ぎのやうなものであつた。

「他人の財産である豚を、無斷で殺して食つてしまふやうな人間は、狂氣者か或は食肉動物のやうな野蠻人であつて、我々の文明に準じて定められた合衆國の法律に依つて律することは出来ない。よつて此の日本人は無罪である。」

### 一五 誤解され易い國民性(二)

日本から行く學生で學資の豊かなものは、多くは紐育・ボストン邊へ行つてしまふが、學資の乏しい書生はカリフォルニア州で夏は農園の手傳などし、冬はこの大學の在る町へ來て勉強をしてゐる。土地の白人も、此等の日本學生には相當の同情心を以て、いろいろな便宜を與へる。

私の友人に某といふ學生があつた。某は白人の家庭にはいつて、その臺所の手傳をしてゐた。或日某は非常に激昂した顔色をして、私たちの泊つてゐた家に歸つて來た。荷物や書物やを兩手に携へて、青い顔をして自分の室へ駈込んだきり暫く出て來なかつた。やがて電話の鈴が鳴つたので、同宿の一人が出て聞くと、D夫人といふ人から、某に直歸つて來てくれといふのであつた。此の某といふは二十五六の至つて正直な青年であつた。が、併

しそ、つかしやであつた。某がD夫人の家で働いてゐる間によく器物を毀すので、D夫人は彼の爲にその給金を貯蓄してやつてゐた。毎週五十仙づつ貯金して、それをクリスマスMASの時に渡してやる。若し何か器物を毀すやうな事があつたら、毀したものの代價を此の中から差引くといふことであつた。

某は小作りの男であつたから、白人の目には十八九の青年に見えたであらう。それで、D夫人が小兒をあしらふやうなこんな罰則を設けたのも、無理も無いことであらう。又、白人の中年の女が、年若の青年を弟扱ひにする親切な情愛から出た事であつたらう。併し某はさうは考へなかつた。人を馬鹿にしたものだ、人をなるとはほだして使はうとしてゐるのだと考へた。

其の日の朝、某は大きな皿を毀したのであつた。應接室でピア

ノを弾いてゐた夫人は器物の毀れた音を聞いて、ピアノを離れて臺所に出て來た。すると、今夜客をする爲に使はうといふので、わざわざ取出して置いた祕藏の皿が毀れてゐた。

D夫人は悲しんだ。「これは英國から來た皿で、十二枚揃つてゐたのに、お前が一枚毀したから、もう半ばになりました。お前が來てから、私の家には揃つたものは何もないやうになりました。」と女らしくかき口説いて小言を言つた。某はぐつと癪にさはつた。

「さうですか、それは一體、一揃で幾らですか。」と聞いた。夫人は、「一揃二十五弗で買ひました。併しお前が一枚分の償ひをして、もう一揃でなければ買へない品物だからほんとに困つてしまひます。そんなに物を毀されてはあなたを使つてゐることも出來ないやうになります。」



といつた。某はポケットへ手を入れた。彼の唇は震へた。二十五弗の紙幣は夫人の前に並べられた。

驚いて何をするかと目をみはつてゐた夫人の目の前で、某は十枚の満足な皿を取上げて、重ねたまま之を窓の外に抛り出した。驚愕の叫聲を揚げて、夫人は慌てて臺所から駈出した。やがて夫人の室の戸の鍵のおりる音が聞えた。

かうして某は宿へ歸つて來たのであつた。その翌日D主人が宿に訪ねて來て、同宿の者に、某に是非歸つて來るやうにと傳言を頼んで行つたが、某は遂に歸らなかつた。三四日たつてから、二十五弗と夫人の預つてゐた貯金と、その週の給料とは再びD主人の手で届けられた。

その後D夫人は同家を訪問した日本人に、どうも私には日本人

の心理はよくわからない。といつてゐたさうである。(佐々木指月)

### 一六 忠 君

我が國に於ては開闢以來君臣の分が定まつて居る。試みに神話を見よ。天地分れて後、伊弉諾・伊弉册の二神がおのころ島に下つて、まづ産まれたのは大八洲の島々である、即ち我が日本の國土である。それに次いで水や木や火の神を産まれた。女神が御崩れになつたので、男神が夜見の國に行つて、女神を見られた爲、其の穢を受けられたのを御清めになつて御産みになつたのが、天照大神・月讀神・素盞鳴神の三神である。この天照大神が即ち我が皇室の御祖先

である。それであるから、日本國土と天照大神とは同じく伊弉諾神の御子として御兄弟である。太古の我が民族は、皇室と國土との關係をば斯く必然的なものに解してゐたのである。

元來、天照大神の御同胞として産まれた國土であるから、天孫が天降つて君臨し給ふことになつても、何人も異存をいふべき理はない。八百萬の神はあつたが、我が天孫に對つて敵對行動を取つたものはない。いづれもおとなしい忠義な神で、天つ神も國つ神も日神の御子孫の事業を輔翼する事をのみ力めてゐる。その事業を妨害したり、その國土を奪はうなどとしたものは一人も無い。我が國の神話

は誠に平和な神話である。これ實に我が太古の民族の忠義な心性を反映したものである。

この太古の民族の精神には、明らかに君臣の分が定まつてゐる。天孫の御血統が即ち帝位を繼がるべき種で、その餘のものは皆この國土にゐてその下に服従すべき種と定まつてゐる。皇室は一般國民と一種別なものである。我等國民よりは一段高いものである、カミである、長上である、神であるとした。これ上代國民の皇室に對する思想である。我が帝國憲法第三條の「天皇は神聖にして侵すべからず」とあるのは、この上古以來の思想の發現である。

然し神として恐れ畏むばかりでなく、また皇室を本家・宗

家とし、多くの親愛の情を持つてゐたのが上代國民の心である。統治者被治者の關係よりはもつと深い、心の底から親睦關係が成立してゐたのである。所謂親子の關係がその間に存したのである。親子の愛情は人間の至情である、マゴコロである。この至情マゴコロが即ち我が國の忠である。我が國では忠と孝とは同じ親愛のマゴコロで、同根に出づる。忠孝一致といふはそれである。

斯く親として親しんで、神として畏れるから、苟も天皇の命としいへば如何なることでも服従する、水火の中に入るをも辭せぬ、矢石の間も顧みぬ。已むを得ずしてさうするのではない、喜んでするのである。萬葉の歌人が、

海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むすかばね、大君のへにこそしなめ、かへりみはせじ。

と詠んだ精神がそれである。

このマゴコロ即ち皇室に對する忠の觀念が、武家時代になつて、主従關係に於ける連鎖となつた。これが武士道の精髓である。主君の爲に身命を惜しまず、事ある時にその馬前に討死するのが、家來たるもののマゴコロであつた。武士道は固より士の守るべきものであつたが、何時しか女に及び、町人に及び、一般國民の間に廣がつた。奉公といふは元來朝廷にだけ對する語であつたが、それが雇人にも用ひられる様になつた。

一旦主従の關係に移された忠は、明治の維新と共に再び昔の通り皇室に對するものとなつてしまつた。即ち階級制度が廢れて、士農工商皆平等になり、天朝直參の國民となつた。久しい間に武士階級に養育されて、町人階級にまで廣まつた武士道精神の忠は、こゝに於てか、もとの天朝に向つてのみ捧げられることになつた。日露戦争の時、何故に日本兵は強いかといふことが世界の疑問となつたが、我々から見れば、このマゴコロがその原因である。而してこのマゴコロはまた世界に比類なき萬世一系の國體を作つた原因であり、我が國をして今や世界に雄飛する強國たらしめた所以でもある。

\*普佛戦争勝利の記念道路  
ベルリン公園の東通り

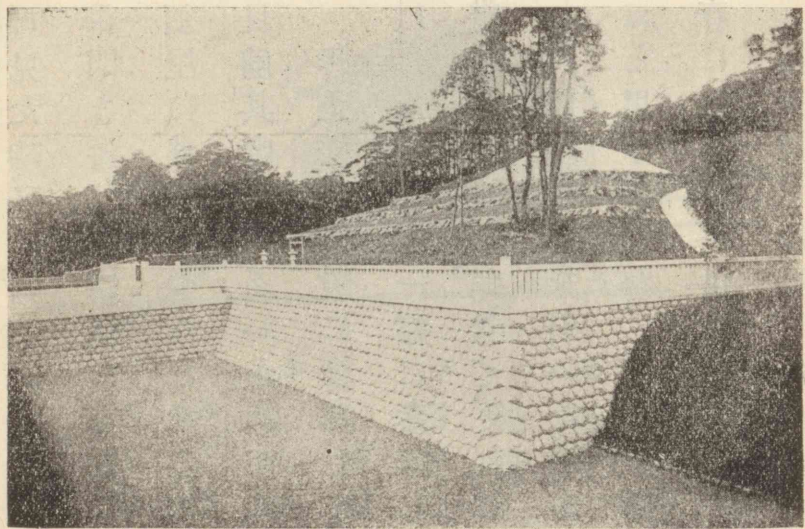
伯林の凱旋路の一端に、高さ幾十丈の凱旋塔がある。その上に金色燦爛たるゲルマニアの女神像が置かれてある。この像は獨逸の國家を代表したもので、固より空想的人物である。英國にはブリタニカ、佛國にはガリアといつて同様な空想的人物を作出してゐる。政體が幾度も變り、王室が屢更代する國に於ては、國民をして古來の歴史を思念させ、國家的觀念を保たしむるに必要として、かゝるものを出したのである。獨り我が國に於ては、神話時代以來國土と皇室とは離るべからざるものとする信念がある。「朕は即ち國家なり」といふ語は、實に我が國の天皇にして始めて宣ふことの出来る詞である。

(芳賀矢二)

\*佛蘭西王ルイ十四世の語

### 一七 桃山御陵に詣てて

母上様。豫定の如く、昨朝八時無事に歸宅致しました。  
 一昨日桃山の停車場から繪葉書でお知らせ申しました通  
 り、此の度當校の職員・生徒合はせて六百三十餘名、桃山御陵  
 に參拜致しました。特別仕立の列車でしたから、途中は只  
 四五個所の大きな驛に停車しただけで、多くの驛を抜きに  
 しましたのは、北陸線では私に始めての経験でした。月明  
 らかに星稀に、氣は澄み心は冴えて、終夜何とも形容の出來  
 ぬ一種清爽の思が、胸に満ちました。是も私には十幾回の  
 旅行に曾て覺えのないことでした。



伏見桃山御陵

明方、京都で奈良線に移りま  
 した。今しも東山の巔に登  
 る朝日の姿。雄大壯嚴、言語  
 に絶した壯美に、吾知らずあ  
 つと申しました。顧みれば、  
 月はなほ西の空に淡い光を  
 放つてゐました。  
 桃山の停車場に著くや、直  
 に私の胸を衝いたのは、祭場  
 殿の装置でした。廣庭・玉砂・  
 假小屋・幔幕、凡そ是等を只一

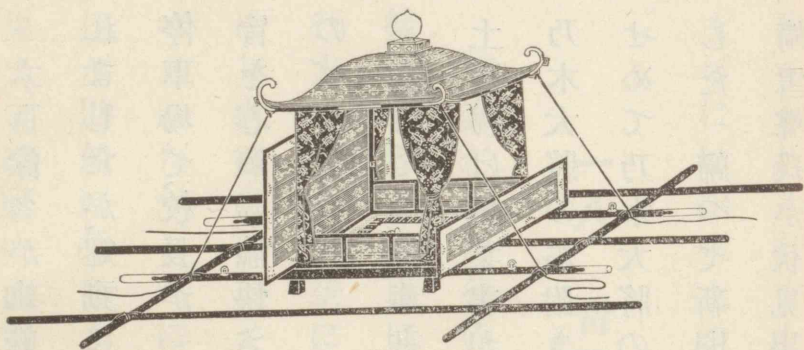
目見た時、私の胸は急に詰つて、眼鏡は忽ち曇つたのです。御聞き遊ばせ、靈柩を奉安して傾斜鐵道に依つて御陵の御須屋に移し奉つたと承る、其の折の臺車も軌道の一部分も、目前其處に据ゑおかれてあるではございませんか。

母上様。御陵に參拜して、まづ何より先に思ひましたのは、母上様と御一緒に參拜したいといふことでした。日に幾萬といふ參拜者で、それはそれは大した人です。子を連れた親親の手を引いた子、あゝ私も是非あのやうに御一緒にと思ひました。どうぞ御達者でいらしつて下さい。來春には必ず御供致します。

葱華輦を拜見しただけでも非常に深い感じを起しまし

た。まして遙に御須屋を禮拜した瞬間、森嚴崇高の感に誰一人打たれぬものがございませう。竹の林を出て、白葱砂をしきつめた御陵の廣庭に立つて、松青く鳥居眞白き山陵を伏し拜めば、  
華敬虔の情が胸に漲るのです。

輦京都で數時間自由散歩を許されましたから、藤井先生を訪うてその御案内で下鴨へ參詣しました。夜の八時五十分東本願寺に集合して、九時過ぎ、再び夜行で歸途に就きました。



\*京都帝國大學教授

六百餘名が蜘蛛の子を散らしたやうに京都の市中で別れましたが、定刻には一人遅れず集まつたのです。金澤の停車場で、校長が一行に滞りなく参拜を遂げたことを喜ぶ旨を心から愉快さうに述べられました。そして解散したのです。

桃山には繪葉書屋が何百となく軒を並べておました。土産物は繪葉書が主のやうです。そして繪葉書には必ず乃木大將のが付きものになつてゐます。尤もなことです。せめて乃木大將の御墓も御陵の附近にあつたらと思ひました。歸つて新聞を讀んでおましたら、日本一の鑄金家岡崎雪聲氏が伏見出身の方ださうで、故大將の銅像を郷里に

建てられる計畫をなされたとありました。來春参拜の折までには出來上つてゐませう。さやうなら。\*（八波則吉）

\*文學士  
國文學者  
第五高等學校教授

### 一八 青葉の笛 (一)

平家が一の谷の軍に敗れて、我先にと落ちて行く時の有様は、晩春の夜嵐に逐はれて、花といふ花が一齊に枝を離れ、行方を定めず空に舞ひ翻るやうであつた。この混雜の間に其處彼處に於て、随分目も當てられぬやうな大悲劇が演ぜられたが、こゝに武藏國の住人、熊谷次郎直實は、平家の公達が助船に乗らうとして海岸の方に續々落ちて行くのを見て、「天晴好い大將軍と引組んで功名しよう。」と思ひ、細道に

かゝつて途を急ぎ濱手の方に遣つて來た。

すると爰に、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍を置いて乗つた一騎の若武者が、沖に居る船を目がけて馬をさつと海に打入れ、はや十間ばかりも向うに泳がせた。丁度その時、濱にやつて來た熊谷は、それを見るより鎧を踏ん張り聲を張り上げ、

「其處に御渡りあるは平家方の大將軍と見たてまつる。

敵に後を見せ給ふは卑怯なるぞ。返させ給へ、返させ給へ。」

と扇を上げて招くと、其の人は健氣にも駒の首を立て直して此方に返し、汀に上らうとする所を、待ち受けたる熊谷得

たりと波打際で馬を並べてむんずと組み着き、馬と馬との間に二人はどつと落ちたが、直實は苦もなく敵を組み伏せて動かせず、すでに首を搔かうとして兜を押除けて見ると、こはそもいかに、野獸のやうな坂東武者の眼には、「地上の世界にこんな美しい人が居るであらうか」と疑はれるほどの美少年。正しく平家の公達と見えて、花のやうな顔に薄化粧し、齒は黒々と鐵漿てつじやうに染め、玉なす眼の涼しさよ、年は我が子の小次郎と同年位で、ことし丁度十六七、薰物のえならぬ香氣が鼻を撲つて、熊谷にはどうしても、これが敵とは思はれぬ。寄せては返す浦波の濱邊の白砂に組み敷きながら直實は問うた。



「そもや御身は如何なる御方にて渡らせ給ふぞ。名のらせ給へ、助けまゐらせう。」

「まづさう云ふわ殿は誰ぞ。」

「物の數ではなけれど、武藏國の住人熊谷次郎直實と申すものでござる。」

「さては汝が爲には好き敵ぞ。名乗らずとも首を取つて人に問へ、後で必ずわかるであらう。」

と言つて、靜かに目を閉ぢ、既に覺悟の體である。熊谷は取つて押へた手が弛み、あつばれ好き大將軍ぢや。今日この際、この人一人を討つたからと云つて、負ける軍に勝つべき筈はない。また助けたからと云つて、勝つ軍に負けさうな

事は無い。貴賤の別なく、子を思ふ親の心は人も我も同じこと、思へば今朝一の谷の西門で我が子小次郎直家が少々薄手を負うた時でさへ、我は親心に我が肉を殺がれ我が骨を削られるやうな思がしたが、この君此處に討たれたと聞き給はば、いかに戦場の習ひとは云ひながら、兩親の御悲歎はいかばかり。よし窃に助けまゐらせう。と決心し、四邊を見れば幸敵も味方も居らぬ。熊谷急に少年を引起し、砂を拂つて沖に見える一番近い船を指し、

「彼の船に早く馬を泳がせ給へ。さあ、今の中に少しも早く。」

と促す儘に若武者は目禮し、馬に乗らんと鎧に片足かけた。

此の時彼の時殆ど同時に、土肥・梶原・平山など五十騎ばかり、濱邊傳ひに駈けて來る姿が間近く見えた。熊谷は遺憾至極。

「あゝ、御運の末か、是非もなや。」

と歎じてはらく、涙を流し、

「あれ御覽あれ、生憎と味方の勢が參つたわ。いかにもして助け參らせうとは思へども、彼等が來てはよも遁しまゐらせまい。おなじくは我が手にかけて討取り奉り、せめては後の御追福をなりとも懇切に……」

遁れぬ所と若武者も胸を据ゑ、

「おなじくば汝が如き情ある武夫の手に我が首は授けた

う、うて……」

と手綱を放し、西に向つて白砂に坐し、早くも凝然と玉の如き眼を閉ぢる。

### 一九 青葉の笛 (二)

「然らば御免。」

熊谷は心を鬼にして、すらりと太刀を拔放つ。

君を惜しむか龍神の、磯うつ波の音高く、濱邊を風の立ち騒ぐ。熊谷早くも後に廻り、

「南無阿彌陀佛。」

唱へも果てず、紫電空に跳つたが、我も子をもつ人の親、白刃

の下に合掌して、凝然と動かぬ花の容顔、雪の肌、餘りに無慙で、いぢらしくて、何處に白刃を當てやうも無い。

「あゝ、我この君を討ち奉るといふは、いかなる過去の宿縁ぞや。」

目もくれ心も消え果てて、直實は前後不覺。

土肥の次郎を先として、續く梶原平山の武者所、砂煙を上げて飛んで來た。

「今は。」

再び氣を勵まし

「えゝゝ。」

聲と共に首は前に。鮮血見る間に白砂を染め、花は散りけ

り須磨の浦。

熊谷茫然として太刀を提げ、死骸を前に凝然と突立ち、眉を擧めて夢心地して居ると、習々と耳を掠めて哀を吹き行く一路の春風、主なき駒の獨り嘶く。

「やあ熊谷殿には好き敵と組まれしよな。」

横をつと馳せ過ぎざまに言ひ棄てて、他の働には目も止めず、土肥等は各自好き敵を搜して向うに駈去つた。

直實は我に復り、

「あゝ、弓矢取る家には生れぬものぢや。我武藝の家に入らば、今日かうした憂き目は見ないものを、情なくも終に討ち取り奉つたか。」

涙は情の記念である。さすがの坂東武者も鎧の袖を顔に押しあて押しあて、さめざめと泣いて居た。

やがて少年の首を包まうと思つて、鎧や直垂を解いて見ると、あはれや錦の袋に入れた笛をば腰に挿して居る。熊谷これを見て膝を打ち、

「おゝ忘れもせぬ、今朝の曉に、西の城戸口に押寄せた時城の櫓に笛の音の起るを聞き、身にしみじみと物のあはれを覺えたが、彼の床しい音色の主は、あゝ、さてはさてはこの君にてありたるか……」。今日味方の東國勢、何萬騎と云ふ内で、軍の陣中に笛などをば持つやうな心がけの人は一人たりともありはすまい。さてさて都の人は優し

いものぢや。

直實感じてこの笛を首に添へ、大將軍義經の見參に入れると、見る人毎に涙を流した。

其の後平家の捕虜に訊して、これは修理大夫經盛の末子、無官大夫敦盛と云つて、生年十七歳になる公達の首であるといふ事がわかり、又件の笛は名を「青葉」と云つて、祖父忠盛が笛の上手であつたので、鳥羽院より下し賜はつたものを、其の子經盛に傳へ、經盛は敦盛に笛の器量があつたので、この笛を傳へたのだと云ふ事がわかつた。熊谷はこれ聞いて、敦盛の首と笛とを義經に請ひ受けて、二つながら父經盛の許に送つた。

後熊谷が發心して佛門に入り、京都黒谷なる法然上人の弟子となつて蓮生と稱するに至つたのも、敦盛を討つたのが遠くその動機となつたといふ。  
(萩野由之)

\*文學博士  
國史學者  
東京帝國大學教授  
であつたが數年前  
故人となつた。

二〇 ちんちん千鳥

ちんちん千鳥の啼く夜さは、  
啼く夜さは、  
硝子戸しめてもまだ寒い、  
まだ寒い。

ちんちん千鳥の啼く聲は、  
啼く聲は、  
燈を消してもまだ消えぬ、  
まだ消えぬ。

ちんちん千鳥は親無いか、  
親無いか、  
夜風に吹かれて川の上、  
川の上。

ちんちん千鳥よ、  
お寝らぬか、

およらぬか、  
夜明の明星がはや白む、  
早や白む。

(北原白秋)\*

\*名は隆吉  
詩人

二一 薬とり

鳥は鳥ゆゑ  
おとなしく  
林の奥の巢にねむり、  
月は月ゆゑ

さびしくも  
はるばる空をひとり旅、

僕は兄ゆゑ  
たのまれて  
遠い夜道を薬とり。

(西條八十)\*

\*童謡詩人

二二 旅人となりて

今朝八時半の特急で下關まで一氣に走ることにしまし  
た。東京を立つ時には珍しく細雨を見ましたが横濱あた

りからすつかり霽れて、復もとの蒸暑い天氣になりました。青い山、青い畑が鐵道線路を挟んで追つて來ると、谷間にも、野の面にも、白百合がちらほらと見えます。葛の花や、朝顔が、畑にも、家のまはりにも咲いてゐます。空も、山も、流も、光に輝いてゐます。

目を閉ぢて車の軋る音を聽きます。汽車はひたすらに光の野を西へ走ります。

國府津に着いて始めて海らしい海を見、山らしい山を見ることの出來たのは、うれしいことです。箱根や乙女峠には雲がかかつてゐます。

箱根に入つて、さすがに高原らしい涼しさを覺えました。

文字通りに青いカーベットを敷いたやうな裾野には、明方の星をばらまいたやうに、白い百合が咲きこぼれてゐます。線路に沿うた圓い柔かな線を系がいた丘には、離々たる青草の上に盛上げられたやうにして白百合が咲いてゐます。ねむの花も、石竹も、女郎花も、一樣に青嵐と芳草のうち七月の光を浴びてゐます。

川は瘦せてゐます。白い礫の上を滑る清冽な水は、青い山の麓を縫うては、青い嵐のなかに隠れて行きます。蓑を被て深潭に釣を垂れてゐる男もあります。高原を走る汽車を見下して、更に高い山道を歩いてゐる少年の群もあります。乙女峠には雨が降つてゐます。



「富士山は見えますか。」  
私は突然隣の男に沈黙を破  
られました。その男は始めて  
日本を旅行する臺灣人であり  
ました。富士は雪に鎖されて  
見えませんでした。私はこの  
旅人に對して氣の毒に思ひま  
望した。私は微かに雲霧の間に  
見えてゐる富士の稜線をたど  
つて、その男に富士の形を説明  
してやりました。汽車は裾野

を三島の方へ走つてゐます。時に横なぐりに時雨のやう  
な寂しい雨が降つて來ます。斜に打ちつけられた雨の脚  
がまだ乾き切らぬ間に、正午の太陽が焼くやうに硝子窓を  
射ます。けれども、高原の風は青く薫つてゐます。「禁喫煙」  
の禁を犯して煙草をふかしてゐる者もあります。けれど  
もここでは、それを憎む氣にはなれません。薫風と青嵐の  
間に包まれた人間の集合は、自然が生んだ可憐な嬰兒の遊  
戯に過ぎません。彼等の行爲はすべてさながらのもの、善  
きものとして、受容られることが出来るやうに思はれま  
す。

私は幾度か小さな行李の底から本を取出しました。け



れども、私はすぐ本を捨てました。どうしてこの偉大な自然から私の眼を離すことが出来ませう。

桑の畑、芋の畑、黍の畑を隔てて、汽車は富士を中心に大きな弧を彖がいて走つてゐます。黍の赭い穂の上に雲の峰がかかり、四十雀の唄が聞えてゐます。馬洗ふ里の子供たちの上に煙を残しつゝ、汽車は鐵橋を渡つてゐます。うとうと眠つてゐた眼に、紅い蓮の花の咲いた田が長くくく續いてゐるのが映ります。淡い薫が夢を誘ふやうに窓を襲うて來ます。一羽の白い鳥が紅い花の上を靜かに飛んで行くのが、靜かな抒情詩を讀んでゐるやうな心持を喚起します。追ひくく太陽が陰つて行きます。伊吹山の白く顔

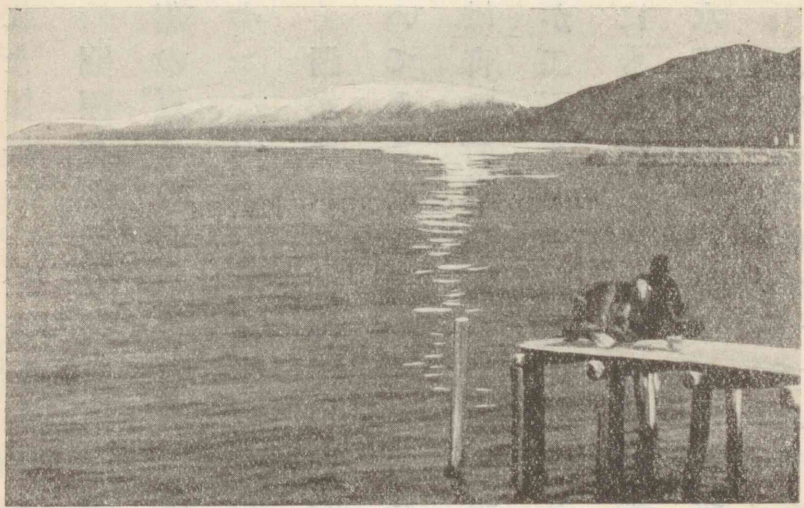
れた傾斜面が、午後の太陽をまともに反射してゐます。

關原や醒井などいふ聯想の多い驛の名が續きます。芭蕉の夏草＊の句を想はせるほど、山も平野も青々としてゐます。この附近から西は野の百合が紅くなります。

湖水に沿うた村々の家の白い壁に、力ない夕陽の影が動いてゐます。田や畑の隅々に小さな木立があつて、そこには青い竹で作られた桔槔がかゝつてゐます。若い女たちが二三人づつて耕作物に井戸の水を撒いてゐます。二段にも三段にも水車をかけて、湖の水をかい入れてゐるのも、水郷の感じを深くさせます。

比叡の峰は曇つてゐます。黒い雲を破つて眞紅の夕焼

＊夏草やつはものど  
もの夢のあと



琵琶湖の上の眺望

が湖面を壓するやうに燃えてゐます。瀬田の流に群をなして白い鳥が眠つてゐます。

逢坂山のトンネルを越え  
ると、大きな角の牛がその  
そと荷車を牽いて、近江の方  
へ歩いてゐます。黄昏は牛  
の背に落ちかかつてゐます。  
日はとつぶり暮れました。  
紅の提燈の灯が闇の中に

幾段にも幾段にも重なつて、流に沿うて映つてゐます。

「賀茂川の灯」

人々は窓を明けて、闇の底に紅い灯を見出してゐます。長いプラットフォームに下駄の音が響きます。思ひなしか、下駄の音までゆつたりと聞えます。人々は大方出て行つてしまひました。新聞紙や折などの散らかつた薄暗い室のなかに、私は又これから先の二百里餘りの旅路を想つてゐます。さすがに旅らしい淋しさが、どことなく漂つてゐます。

(吉田絃二郎)

\*名は源次郎  
早稻田大學講師

二二三 大井川

駿河國志太郡  
大井川の東岸に在  
る  
遠江國榛原郡  
大井川の西岸に在  
る

東海道島田の驛は此處に盡きた。「此の川一つ向うへ渡れば、其處がすぐ金谷の町だ。」と云ふ。今、大井川の冬枯の堤に立つ。

飽くまではしやぎつた冬の空は、底も知れぬ程凝つて蒼く、見るも寒げに、高くく澄んで居る。白い雲が、時々ぼつちり浮かんでは、又一溜りも無く吹き流される。風の風いだ大海に、白い帆影が現れては、又亡つて行くとも思はれる。日は小春日の様に暖いが、風は飽くまで冷たく骨を刺す。岸の楊の葉は半ば枯れて、ほろく零れる。肩を窄めて、俯向いて泣いてゐるのではあるまいか。名も知らぬ小鳥が、矢の様に、ひよいひよいと飛んで出ては、劈く様な細

い聲でひいくと啼く。「冬が來た。宿が無くなつた。」と鳴くのかも知れぬ。名にし負ふ天龍富士に押並んで、東海道隨一の大河と呼ばれた大井川も、今は瀬は涸れ、水は落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、眼前に展開されてゐる。見渡す河上も河下も皆磧である。石といつても幾百年と無く激流に洗はれて、握飯の様に圓くなつて、灰茶色に晒されて居る。其の灰茶色の磧の中を幾箇にも割つて白く動くは、大井川の流であらう。白い流水は、日光を浴びて、青く緑に閃く小石を噛み、大石を噛んで、瀬枕立てて滔々と流れて行く。小鳥の時たまに啼く聲が、他界からでも來る様に響く外には、河の兩岸の此の眞晝は、寂として鍛冶屋の鈍音

一つ響かない。若し夢に容あらば、此の静寂は即ち夢の容

であらう。若し夢に聲あらば、此の

流の聲は即ち夢の聲であらう。水

は滔々として百年・二百年の夢を見

て、夢の様に流れて居る。岸に立つ

人も亦恍として、何時しか二百年・三

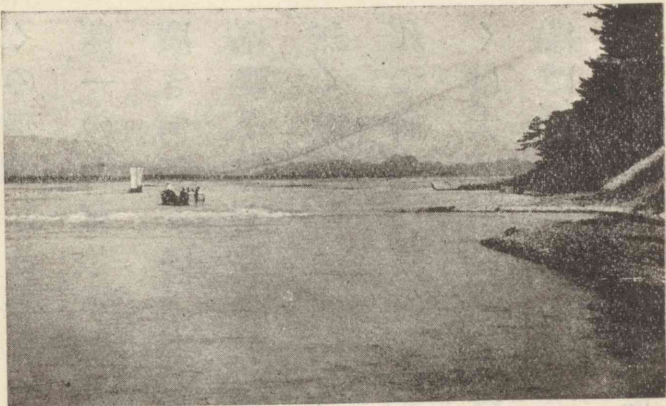
百年の昔の夢を繰り返してゐる。

「箱根八里は馬でも越すが、越すに

越されぬ大井川。何處となく長閑な

馬の鈴がちやらんちやらんと鳴つ

て、空にも入れよ、地にも徹れよと、涼しい馬子唄の聲が夢に



大井川の渡船場

入る。吁、富士と云はず、天龍と云はず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流は何處にあらうか。獨り大井川は、船で越すことを許されなかつた。徳川幕府が江戸に移つて關東を經營すると共に、大井川を東海一の要害と見た。若し船で上流に溯り、下流に下つて、此の河の形勢を見極める者があれば、天下の守は悉くこれから破れる。乃ち令して川越しを行はせたと、土地の歴史に精しい人は説く。

斯くて裸一貫の荒くれ者は、東海道唯一の名物となつた。さしも鬼を取挫ぐ荒くれ武士も、其の背に負はれては、ぐうの音も出ず。島田・金谷の全盛目を驚かしたのも、今は昔だ。寢てこそ渡れ大井川。其の大井川の岸に、今初冬の日光を

滿身に浴びて立てば、盡きせぬ流の聲も、無意味に聞く事は  
 出来ぬ。石に碎けて咽ぶのは、昔の全盛を聞け」と語るの  
 はないか、今の零落に泣いて居るのではないか。  
 自分は昨夜、日が暮れてから、島田の驛に降りた。降りる  
 人は僅かに一人二人。狭いプラットホームを潜つて驛  
 を出ても、人力車一つあるではなし、誠に言はうやうもない  
 さびれ方である。風は寒く、滿天の星の光さへ洩えてゐる。  
 ぶるくと震へながら、舊式の懸行燈の火影をたよりに、靴  
 を抱へて一夜の宿を探した自分は、更に又、島田の宿の衰頹  
 に泣かざるを得なかつた。  
(千葉龜雄\*)

\*  
 號は江東  
 讀賣新聞記者

二四 元日の歌

元日の心は若し、  
 すがくし、美し、やさし。  
 人すべて一つになりて、  
 ほゝゑみて諸手をつなぐ。

商人も我等を責めず、  
 貧しきも富をにくまず、  
 盗人も盗を忘れ、  
つみびと  
 囚人も今日は休らふ。

溢るゝは感謝の思、  
太陽も讃めて拜まん。  
御注連繩・門の松竹、  
見る物に春の色あり。

霞みたる都の方に、  
午砲どんの音かすかに響く。  
打仰ぐ青き空には  
紙鳶いさな近くうたへり。

歌\*

(與謝野晶子)

## 二五 北國春信(一)

私達は此の冬ぐらゐ冬の怖ろしさを感じたことは嘗てありませんでした。正月の殆ど半ばは、一日として止むことなしに雪が降り續きました。家々は全く雪の中に埋められてしまひました。家の中は硝子戸のある狭い「明り取り」から射す仄かな雪明りの外は、全く晝夜の別なき闇が閉ぢこめてゐました。平地に積つた雪の深さは一丈程でしたが、その上へ屋根から卸した雪が積み重なりましたからたまりません。一時は全く穴居同様の有様で、外へ出ますには門口から二丈餘もある高い雪の山へ登らなくてはならぬわけでした。それでも妙なもので、どんなに深い雪の上でも踏み固め踏み固めされますと、いつしか堅い立派な道がつかまし

た。お互に自分よりも先に歩いた人の足跡を追うて歩くやうにしてさへ行けば、自分も雪の中へ埋まらずに行けますと同時に、それが又いつとなしに堅い立派な道を固めることになるのでした。雪道に限つて、自分だけ別の道を歩くといふことは禁物です。

先ゆきし人の足あと消えてなき

白雪の上をひとりわが行く。

時にはかうした壯快な氣持で歩くやうなこともないではありませんでしたが、しかしそれは道筋の明らかにわかつてゐる場合のことです。多くの場合それはたまらなく心細い、そして危いことでした。

深い雪の上を歩きますには、私達は多くの場合、藁の深沓を穿きました。此の藁の深沓を私達は「スンプク」と呼びならはしてゐま

す。更にそのスンプクにカンジキと云ふ直径一尺ほどの丸竹の輪に井字形に藁繩を張つたものを結びつけて歩くこともありました。私は毎朝學校へ通ふ子供たちのために、門口から街道までの間の道を踏み固めました。朝ごとに一尺以上の新らしい雪が昨日つけた道の上に積つてゐました。

わら沓をはきたる足に踏む雪の  
鳴るおとも今ほしたしくぞある。

こんな歌を以前よみました。全く藁沓を穿いた足で、力強く踏みつける度にギユギユと雪の鳴る音は、一種快い感じを與へるものです。

やがて形ばかりの道筋が出来ますと、子供たちはころがるやうにして、吹雪の中を出て行きます。

子等あまた呼びかはしつゝ、雪みちを

おくれ先だち學校へ行く。

吹きつゝのるあらしの中を出で行きし

子らがちひさき雪の足あと。

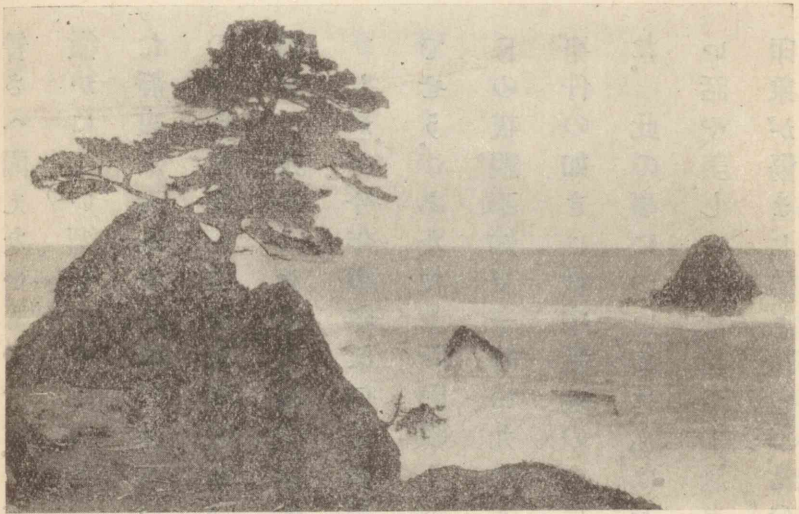
これも皆舊作ですが、かうしてながい冬の間を毎日子供たちを學校へと出してやるのは、毎年のことではありながらもいつも新たないとしさを感じないでは居られぬことでした。しかし、深い雪に降り埋められた生活のわびしさを最も身にしみじみと感じますのは、何といつても夜でした。夜になりますと、雪がどん／＼積つて道が絶えると、踏み出す氣にもなれませんが、随つてそれを踏分けてまで訪ねて来る程の人もめつたにありません。また深い雪の中では、外界の物音は何一つ聞えませんが、荒れ狂ふ吹雪の

音さへ聞えないものです。たださうした寂然とした沈黙の底に、微かに凄い響を立てて居るのは、波の音だけです。思へばかうした静寂な天地の一隅の薄暗い電燈の下に、火燵に親子五人が毎晩のやうに頭を寄せ合つて、わびしく暮らして來た冬籠りの期間は随分と永かつたやうな氣が致します。

しかも、今年の冬は何と云ふ傷ましい凶事の多かつた冬だつたでせう。あなたも新聞紙上で御承知のことと思ひますが、先月三日の夜親不知で一時に九十人もの人達が雪崩のために慘死した事件の如きは、就中私達の心に時ならぬ打撃を與へた大事件でした。此の事については、私はお話したい澤山の傷ましい話や、悲しい話や、美しい話を持つて居りますが、あまりに其の當時の光景の印象が傷まし過ぎたので、當分のうちは私にはとてもそれを口に

\*大正十年二月  
\*越後國西頸城郡市  
\*振外波兩村間の海岸





親不知の景

したり筆にしたりする氣にはなれないのです。何しろ壁のやうに突立つた山の四百尺も高い山腹から深さ二三丈もあり、廣さ一千坪ほどもあつた大雪崩が、二百人近くの人がごちやごちやとかたまつて乗つてゐた列車の上へ落ちて來て、何もかもめちやめちやに打潰してしまつたのです。其の結果は申すまでもなく、憐慘を極めた有様だつたのです。しかもそれは翼を含んだ怖ろし

い西北風の吹きすさむ眞暗な夜の出來事だつたのです。私は今自分で何事をもお話しする氣になれません。

### 二六 北國春信(二)

雪雪、それほど怖ろしい殘虐な災害をすらも醸し出した雪、全く一時はどうなることだらうかと云ふやうな不安に私達を朝夕おびえさせてゐた雪、如何なる人間の力を以てしても、鐵道の開通すら一時は全く不可能であつたほどの雪、それがどうでせう、今ではその消え方の不思議さに私達を驚かしてゐるではありませんか。見渡すかぎりの地面に、一丈・二丈もの深さを以て積つてゐた雪が、家一軒流すほどの洪水にもならず、いつの間にか全くいつの間にか、すつかり消えてしまつたのです。降り積る時には誰一人と

してそれを氣にかけない者のなかつた雪が、消える時には、誰一人  
どうしてそれが無くなつたかを知る人がない程に、いつの間にか  
こつそりと消えてしまつたのです。そして久しぶりで露はれた  
大地には、到るところに若草の柔かな芽が、いさゝかの傷も受けず  
に嬉しさを顔色のぞかせてゐるのです。無論親不知のあの慘  
事のあつた場所でも、他の場所と同じやうに憐な人間の血に染ま  
つた雪崩の消えて無くなつた跡に、去年と同じくさまさまの若草  
が柔かな芽を出すでせう。かうしてまた今年も春がやつて来る  
のです。

さうです、何と云つても春はもうすぐそこに來てゐるのです。  
そして冬の怖ろしさがひどかつただけそれだけ、人々はいつもの  
年より一層もどかしい思ひでそれを待ちこがれて居るのです。

けれども、いよいよ春が來、夏が來ますと、人々は又いつもの年と同  
じやうにいつとなしに冬の苦しさを怖ろしさを忘れてしまひます。  
そしてまた新たな氣持で次の冬を迎へます。かうして北國に住  
む人々は永い一生を安んじて、同じ土地に生活しつづけてゐるの  
です。雪の少い正月はなんとなく淋しい。時にはこんな歎聲をさ  
へも發する年があるほどに、彼等の多くはむしろ雪に親しみを持  
つてゐるのです。

あなたの方はもうすつかり春でせう。桃や菜の花の咲きます  
のも、數日のうちでせうと羨ましく思ひます。こちらはまだ早咲  
の梅さへも蕾を破りません。北日本<sup>\*</sup>アルプスの連山を始め、南の  
方の一帯を立ち圍んでゐる高い山々は申すまでもなく、つい手近  
い小山まで依然として深い雪に包まれてゐます。それでも三日

\*  
飛騨山脈

に一度ぐらゐる青い空と日の光と眞白な山々の姿を見ることが出来るやうになつただけでも、ありがたい氣が致します。海も三月に入つてから時折風ぐやうになりまして、漁師たちは喜んでゐます。風いだ海のはてに眞白な能登の岬と佐渡の山とが時折見える日さへあります。雪解の水の流れ注ぐ川口には幾百といふ鷗が群がつて餌をあさつてゐます。砂濱も日中は陽炎が立ちのぼります。去年の秋、友人に貰つて來たチャボがもう卵を生むやうになつたのも、此の春の小さな楽しみの一つです。ではこれで筆を擱かせていただきます。近いうちに又何かと申し上げます。切に皆様の御健祥を祈ります。

（相馬御風）

\*  
名は昌治  
文士

## 二七 開墾小屋

草生ひ茂る高原の

ところどころに落葉松、

その極まるところに遠い山脈、

高原の路は人のけはひもなく、

路傍にある大きい山梨の木の下に

荷馬車や人の休んだあとも

なつかしく寂しい。

高原には人間の匂ひがない。

ふと麥畑の麥の穂が風にそよいでゐるのを見た私は、  
いつたい誰が耕作するだらうと思つたが、

やがて四五軒の家があつた。  
二里の間に家といふのはそれだけ。

あゝそれらの人の耕す地面は

この高原にとつて巨人の一つの足跡に過ぎない。

しかし人間はこの土を征服しようとする、

男と女との協力はその寂しさをも征服しようとする、

家の前には雞も遊んでゐる、

子供も遊んでゐる。

雪溶けのころになると、

きまつて一つ二つの人骨が出るといふことだが、  
旅人も行き暮れる銀色の雪のなかに埋れて、  
幽かにたちのぼる人家の煙よ。

私があゝの高原を通つたのは八月であつたが、

空には雲雀が啼き、

鶯が落葉松に啼き交はしてゐた。

いま詫びしい冬の日

遠くあゝの高原の人々を思ひ浮かべる。

(白鳥省吾)

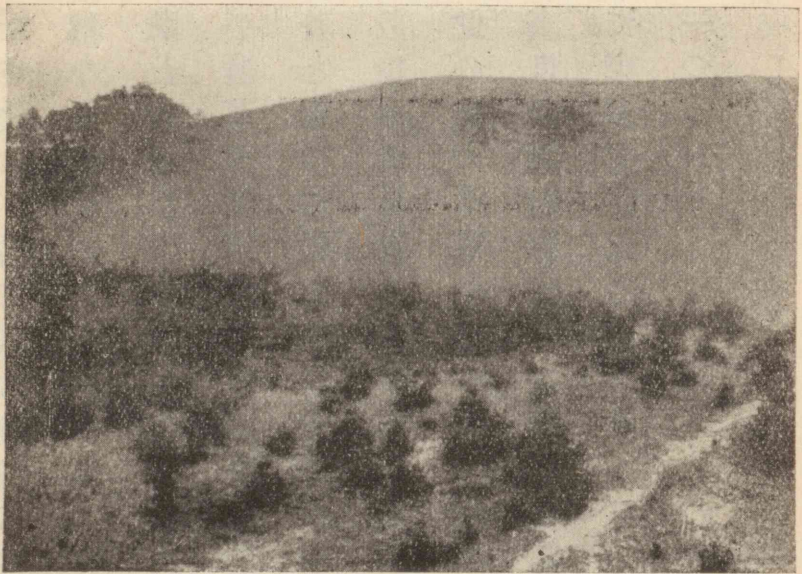
\*  
詩人



若草山

若草山、何と優しい名で  
せう。櫻も散つて是から  
躑躅や藤の季節に移らう  
と云ふ時、一本の木もない  
彼の撫でた様になだらか  
な山一面に若草の萌え出  
した時、而して若草の間を  
處々山躑躅の花が鶉色に  
彩つた時、若草山の姿は實

二八 若草山



若草山

に優しい眺めです。皆さ  
ん方は若草ではありませ  
んか、是から日影長閑な野  
に生ひ立つて、間もなく美  
しい花を着けようとする  
若草の身の上は、やがて貴  
女がた少女のそれではあ  
りませんか。紫の藤浪池  
水に咲きかゝる頃、私は嘗  
て若草山に遊んだ時のこ  
とを思ひ出さざるを得な

いのです。昔の人も「藤浪の花は盛りになりにけり奈良の都を思ほすや君」と歌ひました。藤の咲く頃は奈良と此の歌を思ひ出すのです。

若草山は奈良の町の東にある山で、近處の山々は木が鬱蒼と茂つて居るのに、これは木の無い草ばかり生えた山で、散歩がてら登るのに丁度よい山です。若草の芽の出る前此の山の枯草を焼く時は、なかく、壯觀ださうで、寒い風が奈良の大路を吹き捲くる黄昏、門に立つと春日の森を越えて東の方に火がチラ／＼見えるのは、忘れ難い旅の思出の一つでありませうが、五月の頃の若草山はそれにも勝つて楽しい眺めです。

\*天類 伸

\*文學博士  
史學者  
東北帝國大學教授

### 二九 七面鳥

閑雅な孟宗の枯れ色は私にとりて何より親しく感じられる。私は階上の書齋から硝子戸越しに朝夕その眺めを楽しんでゐる。どの窓を眺めても孟宗がしだれてゐる。晴れた日は大概私たちは庭前の小卓で食事をする。時とすると隣の別荘の芝山へ行つて、のびのびと茶を立てたりする。箱根の連山や相模灘の大景を展望して、私達は食後日向ぼつこをする。隣の白孔雀のやうな七面鳥が、番で私たちのまはりをあさつて歩く。かゝした樂は壞れ家に住む私たちでなければ味はへまい。まことに長閑な日常

である。

七面鳥といへば、つい二三日、犬に噛み殺されてしまった。この頃はよく馴れて、私の庭にも遊びに見えた。朝などは入口から傲然と翼を擴げて、食堂の土間にはいつて來る。すると、私たちは椅子から立ち上つて最敬禮をする。

「まあまあ、どうぞこちらへ。」

も一つをかしい小話がある。東宮殿下の御慶事の朝のことである。私たちも枇杷の木の下の小卓で、つつましい祝杯を擧げた。濟んでから坊やだけ地面に坐つて遊んでゐたが、そこへ七面鳥がおそろひで堂堂とやつて來た。伯爵に伯爵夫人といつた風である。暫くすると、坊やが「どう

ぞ、どうぞ」と言つてゐる。何をしてゐるのかと、硝子窓から覗いて見ると、坊やはその伯爵様に仰向いて、しきりに盃をさしつけてゐるのであつた。

その七面鳥も殺されてしまつた。隣の監督さんがその赤い肉を皿に盛つて來た。さすがに寂しさうにしてゐたが、私たちも急に寂しくなつてしまつた。

それでも、その赤い肉は晩には焼いてたべた。坊やは「おいちい、おいちい」といつた。寒さむとした孟宗林の中の私たちの生活はかうしたものである。

白い梅の花もちらほら咲き出したやうである。

(北原白秋)

三〇 「いつしかに」

自然界に於ける生命の活動や季節の推移は、人目に立たないものである。随つて自然界の推移には、「いつしかに」といふ言葉が最もふさはしい。

私の家の裏畑には、父の死を記念するために私自から植ゑた桐の木が、すく〜と群り立つてゐる。勢よく眞直に伸びた其の幹、思ふさまひろがつた其の枝、葉を落して裸になつた桐の木の姿は、いかにも氣持のよいものである。しかし今日此の頃、眞白に積つた雪の中でそれを見るのは、一層快い。僅か十本ほどの木ではあるが、それでも自分の

手で植ゑもし育てもしたのが、かうして一本も枯れずにすくすくと元氣よく伸びて來たことを思ふと、たまらなく嬉しくもあり、懐かしくもある。苗木屋から買つて來た僅かに二寸ほどの太さを植ゑてから、まだ漸く足掛七年しかたゝないのであるが、幹の太さはもう一尺以上になり、高さは家の屋根を越さうとするまでになつてゐる。これも全く「いつしかに」である。昔の父の裏畑に霜月われは桐苗木を植う。桐苗木を植うとわが掘る畑の土はさく〜として音のよろしき。



ましるなるをちの山なみ眺めつゝ桐苗を植う朝  
のはたけに。

あの折こんな歌をよんだことなども今更のやうにおもひ  
出される。

時々私はその裏畑に出て、桐の木の手を掌で撫でて見た  
りした。そしてその度に私はかうひとりごとせずにはあ  
られなかつた。

「いつの間にか、よくもこんなに大きくなつたものだ。」い  
かにも私はその木を植ゑる爲に些かの力を費しもし、また  
それを育てるために多少の面倒も見てやつた。しかし、此  
等の木のかくまで伸び且ふとつた活動には、私の費した勞

力や心づかひなどは、與ふるところ極めて微々たるものに  
過ぎなかつた。しかも、私は彼等の生長について、いやそれ  
どころか彼等の存在そのものに就いても、大概の時間を全  
く忘れて過して來た。今私が彼等を育てたものは自分で  
あると思つたことが、餘りに甚だしい僭越であつたと自ら  
恥ぢずには居られぬほど、それほど私は彼等について無頓  
着であつた。

それにもかゝはらず、彼等は伸びた。それにもかゝはら  
ず、彼等は肥つた。凡ては「いつしかに」の働きの結果である。  
かう思ふと、私は今更のやうにその所謂「いつしかに」の活動  
の偉大に驚かずには居られぬのである。

子が生れる、育つ、そしていつの間にか成長する。毎日傍  
 て見てゐる自分の子供たちの存在と成長とに對してすら、  
 私達は時々大きな驚きを感じさせられる。やはり、いつし  
 かに働いてゐる力の偉大に對する驚異である。しかも、多  
 くの場合私達はその偉大な力の働きを忘れてゐる。そし  
 て自分達の小さなはからひ、こざかしい思はく——さうし  
 たものにばかりこびりついて、一面に於て自分といふもの  
 を餘りに誇大視しながら、他面に於てあまりにせゝこまし  
 く自らを苦しめてゐる。

今更に春を忘るゝ花もあらし安く待ちつゝ今日  
 もくらさん。

\*  
 名は昌治  
 文士

かうした境地にのみ安住出来ないにしても、せめては今  
 少し私達は「いつしかに」の偉大さに信賴することが出来な  
 いものだらうか。

\*  
 (相馬御風)

### 三一 青磁の鉢

直女は美濃國岩村藩の老臣萩山某の女なり。才あり、智  
 あり、仁慈の心特に深かりき。

直女の父盆栽を好み、多くの奇樹・珍木を蒐めけるが、中  
 にも青磁の鉢に栽ゑたる梅の古木、その器、その樹と共に天  
 下の逸品として、自らも誇り、人も稱ふるところなりき。

一日、年若き婢女、庭に出でて、盆栽に水をそゝぎ居たるに、

飼犬の赤來りて裾にまつはり、袖にじやれつくに、婢女「しつ、しつ。」と言ひつゝ、軽く追へば、赤は逃げ去りて吠えかゝる。婢女はなほ「しつ、しつ。」と叱りつゝ、小石を拾ひてちやうと投げ付けたるに、其の石はたと腰掛臺の角に當り、横に割れて青磁の鉢にあたれば、あはれ鉢は戛然として二つに割れたり。婢女見てあなやと驚き、鉢を見詰めしまゝ、あきれて立ちけるが、やがて一聲高く「わつ」と泣伏しぬ。

直女時に縁側に在りて繪本を披き見をりしが、婢女の泣聲を聞きて、いぶかりつゝ、庭に降りて、傍に進み寄る。忽ち目に留りしは青磁の鉢。餘りの事に我を忘れて、その故を詰り問へば、婢女泣く泣く仔細を語り、いかに粗忽とは申せ

世にも稀なる御品を壊し候うては、死すともその罪を贖ひ難し。いかにせば宜しからんと、唯々途方に暮れ候ひぬ。」と述べ、顔を掩ひて、又さめざめと泣く。直女聽きて心に憐み、首傾けて、何事をか思案すること少時。やがて「安心せよ、われは善きやうに計らはん。」と言ひて、婢女を誡めて去らしむ。折しも父は出仕して家に在らず、夕刻に至りて歸來り、晚餐終りて後、直女を相手に、いと機嫌よげに笑ひ興ず。直女は父が最愛の女なり。父は愛敬滴るばかりなる直女の顔をのぞきて、「嬢よ、其方は父が大切の娘ぞ。」と言ひつゝ、頭を撫づ。直女は眞珠の如き眼を張りて、じつと父の顔を見上げ、「さやうにてはあらじ。われはよりは青磁の鉢をこそ大切

にはおぼすべけれ」と言ひつゝ、莞爾と笑む。父はからからと笑ひ、「何とてさやうの事あらん」と言へば、「さらば彼の鉢わらには賜はり候ひなんや」と言ひ出づ。父は幾度か打ちうなづき、「おゝゝ、其方の望むものは、何にても取らすべし」とて益、機嫌よし。今は心安し。直女後しりへに侍る婢女を見返りて、「それ早くおわびを申せ」と言へば、婢女恐る恐るにじり出で、兩手を突きて頭を下ぐ。直女傍より共に詫ぶれば、父はたと膝を拍ちつゝ、「さてはこれなる女め青磁の鉢を壊せしよな。好し好し、此度こたびは赦し遣らん」と告げ、前に平伏せる婢女を見遣りて、「其方はよき主人を持ちて仕合せぞ。以來よくくゝ氣をつけよ」と誠めしばかり、復その罪を問はず。

婢女うれし涙に咽びつゝ、幾回か主人を拜し、直女を拜すれば、直女亦うれしさを餘りてわつと泣崩る。直女時に年十三ばかりなりき。

(熊田葦城の文による)

### 三二 雛祭の日

雛祭の日が來ました。昔からの習俗の中でも、この遊びは女の子のある家に今も行はれて、美しくもあり、優しくもあり、大人の心までを和かにしますから、此の後も容易に廢るまいと思ひます。歐洲の人々にも「人形の祭」と云つて傳唱されて居ます。其の内には、クリスマスを日本人が摸ねるやうに、西洋の家庭でも雛祭を摸ねる時が來るかも知れ

ません。

東京や横濱では、今年はお雛様の中でお雛様が祭られる事でせう。趣味に屬した生活は、他の硬い、険しい、くすんだ生活でいぢめられた心を緩和します。大人が素直な子供心になります。苦勞を忘れると共に、新しく勵む元氣を生むことになります。この意味で雛祭をしたりする習俗は面白い事だと思ひます。

「ひな」といふ國語は、新しい語源の研究に由ると、「貴女」といふ意味ださうです。もとは美しい女體の人形を作つて「ひな」と呼び、女の子が四季を通じて手遊びにしたのです。「源氏物語」などに現れてゐる雛遊びは正に其の意味のもので

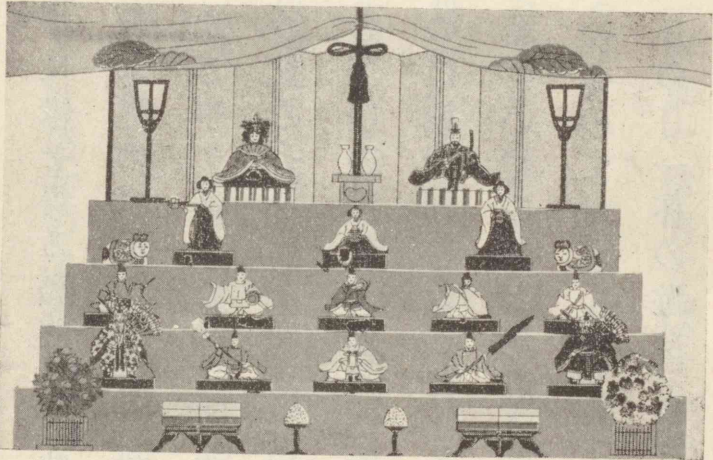
したが、それが次第に變化して七夕の乞巧奠のやうに、女子が良縁を得る願望の意味が加はつて、夫婦一對の人形が出來、京都の縉紳の階級では、女子の最上の幸福は后や女御になる事であつたので、天皇と皇后との一對の雛を作るに至つたのでせう。初めは四季の玩具であつたのが、三月三日の上巳の節と結びついて専ら彌生の季節の遊びとなつたのは、徳川期に入つてからの事で、是は桃や櫻の咲く氣候が美しい雛の趣と調和する所から、陰曆の三月三日と結びついたのでせう。徳川期の初めではまだ三日とは決らず、三月の月一杯の遊びであつたやうです。

今でも地方によつて種々の雛が傳はり、例へば伊豆の大

島の「島雛」のやうなのがあるのは、昔の手遊び物であつた時

代の雛が保存されてゐるので、一般に祭る内裏雛は、其の名の示すやうに京都の貴族階級の間に行はれた特別の雛が民間にまで普及したのです。

近年益々雛の直段の法外に高くなるのには驚きます。その割に美術的に見ると價値の無い品が多いのです。唯材料がけばけばしいだけで製作は非常に粗末です。かう云ふ物の製作に



祭 雛

も良い親切な職人の居なくなつた事が思はれます。

去年の震災火災に、私の宅は火元に接近してゐながら、急に風が變つて焼けなかつたお蔭で、今年も娘達に古い雛を出して飾つてやる事が出来ました。古いと云つても京出來の享保雛ですが、唯略装の内裏雛であるのが異なつてゐます。平服で打寛いだ天皇と皇后とのお姿が非常に親しみ易い感じを與へます。お顔つきが近頃の製作と違つて、大やうで且氣高く出來て居ます。寫實に偏する事無く、よい意味の傳統趣味で藝術化されたお雛様のやうです。

前年の事ですが、或人が私が雛の飾り付けをしてゐる所へ來合せて、「是は意外です」と言つて驚かれた事がありました。

た。其の人は私を想像してゐたよりも古臭い人間だと思はれたやうでした。私は自國の傳統の中の好い物までを捨てようとは考へて居ません。今の生活に組入れて役に立つ限り活かして用ひたいと思つて居ます。生活の上に、或物は世界と共通で差支へない物もあります。或物は日本の特徴を持つてゐるので意義のある物があります。さう云ふ特色までを滅ぼしてしまつたら、世界の生活は單調無味になるでせう。

社會改造を唱へる人達の中には一切の生活様式を歐米風に一變したいと云ふ様な、不自然な、輕卒な馬鹿げた空想を持つてゐる人もあるやうですが、私はそれに同意出来ません。たとへば同じ主義と云つても、その實現の姿には日本には日本流の姿があつて然るべきだと思ひます。必ずしも他國の眞似をしなくても好いでせう。といつて、現代の我々の生活に既に不用になつてゐるものまでをも保存するには當りません。役に立つ限りの傳統を活かして用ひることが好いと思ひます。例へばこの雛祭や、盆祭のやうな民衆の娛樂及び日本木版師や文樂座の人形使ひのやうな傳統藝術は衰へるが儘に放任せず、民間に於ても政府に於てもこれを保護すべきものだと思います。

(與謝野晶子)

\*詩人

### 三三三 鍵と障子

私が始めてブリュッセルの素人下宿に入つた時、定められた自分の部屋を見廻して、私は、錠の多いのに驚いた。戸を開けて室に入ると、その戸を、内から閉ぢる爲に錠がある。北側に窓がある。その窓に亦錠がある。一度これらの錠を下したならば、誰も私の部屋にはいつて來られぬ事になつて居る。

これらの錠を見て、道理からいへば、私は安心すべきであらうが、實際は寧ろ、淡い不安と、浅い危惧に襲はれた。戸棚がある。勿論、戸に錠があり、抽斗に錠がある。洗面臺の下

に四段の抽斗がある。一々それに錠が拵へてある。机にも抽斗がある。それにも亦錠が拵へてある。凡そ開閉の出来る物に、特別の装置の無いものは全く無いのである。郵便を一つ入れに出る。歸る時には、必ず鍵を出して錠を外さぬと、家の大戸は開かぬのである。夜になると、その大戸に内から錠を下す。鍵がなくては、外からはどうせ開かぬ戸であるが、猶用心のために、更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は、外から鍵を入れて、一回半廻さぬと、戸は開かぬ。鍵の生活に慣れぬ私は、この大戸の鍵の用法に就いて、容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿のT君は、嘗て鍵を忘れて、遂に一夜をホテルで過した事があると



いふ。

巴里に来て、始めて西洋の旅館に宿つた。私の部屋は戸を閉めると鍵がなければ、外からは開けられぬ。それにも拘らず、内から又錠を下す爲に、別の鍵が備へ付けてあつた。只今の宿はS君の向隣であつて、同君が讀書の燈は、窓から坐りながら見られるが、しかも同君の部屋を尋ねるためには、錠の下りた戸を四戸開けねばならぬ。白晝に尋ねては、一度は鈴を鳴らして、内から戸を開けて貰はねば、同君の部屋の戸を敲く譯には行かぬ。

私はブリュッセルと巴里とを見ただけであるから、俄に斷言は出来ぬが、恐らく西洋諸國に於ける鍵の數は、人口の

幾倍かに當つて居るだらうと思ふ。聞く所によれば、巴里市の各停車場で、下車乗車する者、日々三十三萬人、地下鐵道に乗る者、日に百七十萬人といふが假にこれらの人々が、五箇づつの鍵を持つて居るとしても、この巴里市だけで、一日約一千萬の鍵が汽車に乗降りする筈である。その外、電車に乗り、自動車に乗り、馬車に乗り、乃至は靴をはいて歩いて居るものを數へ上げたならば、往來して居る鍵だけでも、恐らく半億に達するであらう。實に西洋は鍵の國である。

西洋は個人主義の國である。それ故、部屋を固めるのに厚い煉瓦の壁を以てし、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠を下し、蟄居する時は、敢へてこれを窺ふを得ざらしめて居

る。この地に在つて、遠く日本を顧れば、日本は實に家族主義の國である。而して日本の家族主義が西洋の個人主義と恐ろしい差異を有するが如くに、日本人の住居の様は、恐ろしく西洋人のそれと相違して居る。錠を下した重い戸の代りに、日本では紙一枚の障子で部屋を圍んで居る。

出入自在である。共同主義である。縦令一軒の家が五間になつて居ようと、十間になつて居ようと、實は一間の家である。五間、六間乃至十間の室が離れるが如く即くが如くにして茫然、漠然、自ら一室を成して居るのが日本の家である。この家は實に日本獨特のものである。夫婦始め家族一般、相倚り相信じて一體をなし、その間一點の秘密をも

存せざる所が日本の家族の精神である。

この精神を建築で現せば、即ち日本流の家屋になる。錠を下した戸の代りに、紙で張つた障子になる。西洋にも、日本流の家屋は造り得られる。併しこの巴里の眞中に、さやうな家を造つて見ても、これに住み得る巴里人が居ない。西洋人は室をもつて居る。併し西洋には家が無い。家をもつて居るのは、世界の文明國中唯日本人ばかりである。

(河上肇)

\* 經濟學者  
法學博士  
京都帝國大學教授

### 三四 汝の母より

今次の世界大戰に於て、イギリスの一飛行將校が敵たるドイツの飛行機を射落した時の事である。彼は敵機の地

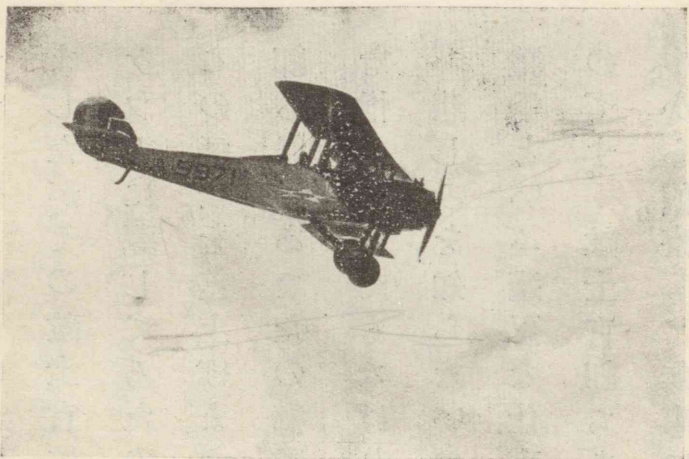
に落ちるのを見ると共に、それに乗組んでゐる敵兵の事を思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の後を追うて着陸した。敵機は翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸はすでに絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐた人の事を思ひ、あはれみの情を催して、その死體を方つけてやらうと胸のポケットの邊にさはると、そこに一つの堅い物があつた。これを搜り出して見ると一葉の寫眞で、それには「汝の母」と書いてある。即ち今戦死した士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏してゐたのを見て、その士官は、一層のあはれみに堪へず、まづ敵の死體を身方の塹壕にもたらし、再び自分の機に乗じてなほ一戦した。その

日の戦にも、イギリス士官は武運強く安全に身方の戦線に

歸つた。

その後イギリス士官は、この射殺した敵とその老母の事を思ひ、それにつけても自分の身の上、且はとくに亡くなつた自分の母の事を考へ、感慨に堪へず、敵士官の姓名をたどつて、彼が母へ一書を送つた。その書面は左の通りである。

「自分はイギリスの飛行士官



です。何月何日、私は敵たるドイツの一飛行機を射落しました。その敵士官は死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、その母御たるあなたにこの手紙を差上げます。

即ち私はあなたの御子息を殺しました。しかしその人を憎んだのでもなければ、又その人の母御たるあなたのお悲しみを知らないのでもないことは勿論です。ただ戦争といふ残忍な仕事に於て、これは私の義務であつたのです。敵士官即ちあなたの御子息が自分の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、その結果として、身方は必ずや敵の攻撃を受けて、身方の兵何人かの生命は、

其の爲に亡くなつたでせう。この不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、その乗組士官の身體に敬意を表し、それを方づけようとする時に、その人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て、羨ましく思ふのですが、その私の殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親が居られ、死ぬまで母御の寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分にはじつとしては居られない感がします。彼の人を殺した私があるに手紙を上げるのは、残忍だとも思はれませうが、私としては、彼の人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親

しい感じを、悲しみの中にも禁じ得ません。私が彼の人を殺したのは、戦争といふ残忍な悪魔のした事です。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、此の事を思つて、私の殺人を容して下さるでせう。さうして又彼の人の亡くなつた代りに、私に一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書くこの手紙は、彼の人と私と二人の魂が一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆を執る手も顫へて書けません。」

この手紙はイギリス軍の本營から、中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の子を喪つた母が、こ

れを讀んだ時の感は、思ひやるだに涙の種である。さうしてこの婦人は、數日後に長々と手紙を書いて、彼のイギリス士官へ送つた。大意は下の通りであつた。

「御手紙の着く前に、悴の戦死は知つて居りましたが、その戦死の相手たるあなたの情深い手紙を見た時の私の思は、御察し下さい。通常ならば、あなたを悴の仇敵といふところですが、御述懐に接しては、その仇敵が却つて悴の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思へます。あなたが悴の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙は私にとつては、戦死した悴の手紙としか思はれま

せん。あなたは倅を殺したといはれ、又事實その通りに違ないことは、勿論知つてゐますが、殺すも殺されるも、ともに各の國の爲で、人として何等の怨も仇もあるわけのないことは、相互に明白なこととせう。その怨もない者が互に殺さうとするのは、畢竟は戦争の爲ですが、これに就いては、私は何も申しません。ただ仇といふべきあなたが私を母のやうに思ひ、私も亦あなたが死んだ倅の身代りのやうに思へるのは、何たる不思議な事とせう。私には三人の男子があり、戦死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戦線に出てゐて、いつ弟と同じ運命になるとも計られません。しかし私は末子の戦死した爲に、あ

なたといふ新な子を得ました。戦争が済み平和の時が來、さうして兄二人も無事に歸ることがあれば、私はあなたにもこの家へ一度來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは死んだ倅と二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滞在して戴きたい。その日の早く來ることを神に祈ります。

さうして最後には「汝の母」と彼の寫眞に書いてある通りに書いてあつた。

この事實だけで十分である。一々註釋を要しない。人情の美は眞心によつてかくの如く結び附くものである。

\*  
嘲風と號す  
宗敬學者  
文學博士  
東京帝國大學教授

\*  
(姉崎正治)

### 三五 笑

昔から「笑ふ門には福が来る」といふ諺があるが、此の諺が眞實であると共に、「福の來た家から笑ひ聲が出る」といふ事も亦眞實である。普通の意味に於て、笑は喜の表出である。誰でも心に嬉しい事があれば、につこりする。嬉しい事は即ち廣い意味でいふ福である。そして又かういふ表出の多い人の處には、益、嬉しい事が寄つて來る。そこで益、笑ひさざめきが多くなり、それが原因で、更に福が寄つて來るといふ様に、笑と福とは互に因となり果となつて、絶えず相伴なふものである。

人の喜び、祝ひ、笑ひさざめく時に、苦い顔や澁い顔をして居る人は、必ず特別に何か面白くない事、苦しい事、腹の立つ事、すべて喜を打消す事情が存するのである。さもなければ、生れついでの不景氣、到底人氣を集めて、人にかはいがられ慕はれ仰がれる事の出來ない氣の毒な人である。笑は人類にばかり許された表情の特權である。此の特權を捨てて、何時も佛頂面をして居るのは、訪ねて來る福の神を追返すやうなものである。

とりわけ女の笑には、自分自らの運命の鍵があるばかりでなく、他人殊に男性の心を支配する無限の力がある。西洋の學者も、女の笑ほど男の心を動かす強い力はないと説

き、大の男が終日奮闘して、怒り悶え、苦しみ悲しみ、種々雑多の感情に疲れ果てて歸つた時に、出迎へる妻の微笑に、不快の分子はさらりと解けて、春の淡雪の跡を留めないやうになると言うてゐる。

斯様に、優勢強力な武器にも譬へるべき笑を、生れながらに具へ持つた女性は、天の恩寵の深い者といはねばならぬ。

\*心理學者  
東洋大學教授

\* (高島平三郎)

### 三六 小善の實行

善い事は誰が眼にも氣持よく見えるものである。今日の午後、私は徒歩で市ヶ谷見附から靖國神社の傍を通つて

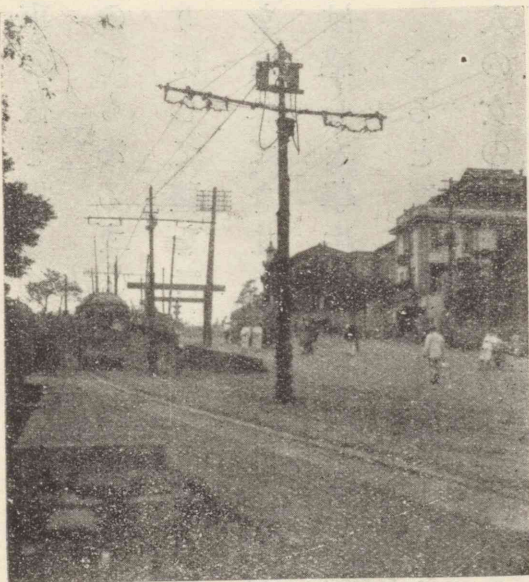
家に歸つた。

丁度九段坂にさしかゝつた時、一人の中學生が一臺の荷車の後を押して坂の上まで來た。勿論誰に頼まれてしたのでもあるまい。荷車を挽いた男は頭を地に附けんばかりにして禮を言つた。その中學生は此の丁寧を極めた禮をされて、きまり悪さうに、一寸頭を下げて行き過ぎた。私は感心な學生だと思つて坂を下りた。

すると又、坂の途中で一人の小間使かと見える婦人が一人の女の子を連れ、左の手に洋傘をさし、右の手を車の後に掛けて、一所懸命に押して上つて來るのを見た。その車は泥を満載した車であつた。私は非常に感心した。到底こ



れは物好きなどで出来ることでない、必ず或主義・信念を持つてするのであらうと思つた。



九段坂の圖

秋とはいへど、暑い盛りの午後の二時半頃である。瀧のやうに汗を流して、重い荷をあゝ急な坂道に挽いて登る労働者の苦痛はどんなだらう。心ある者はこれを見てきつと同情の念を起すに相違ない。けれども、人を見て居るのが恥づかしいと思ひ、女だからと憚つてゐる間に機會を逸してしまふ。そこに主義・信念の必要がある。困る者を助けるといふ主義、助けねばならぬといふ信念があつて、始めて同情心を行爲に表すことが出来る。

「善は小なりと雖も行へ」とは小學校の一年の時から教へられて居る。併し、小善を行つてゐる人がどの位あらう。私の見聞してゐる範圍でいへば、東京市などでも大善の行はれて居るのを見ることは甚だ稀である。大善のよく行はれてゐないことは小善の行はれて居らぬ證據である。高い山の嶺には一足飛びには登れないやうに、小善を行はない人に大善の行はれることはない。大善を行はねばならぬ高位・高官に居り、また大富を有する人は、その昔小學校

で善は小なりと雖も行へど教へられた人々であらう。過去から現在を知り、現在から未來を推す時、私はやはり善を行ふ人は甚だ稀だといふ斷案に到達する。時として善行と見えるものもあるが、多くは打算的な利己的な影が、その背後に映つて見える。物質主義の流行の盛んになり行く今日から將來を思ふ時、私はこの點に多くの恐を感じる。

私は物質主義の世の中に、かの中學生の如き、又かの婦人の如き、物質を超越した神様のやうな心を持つ人を見て實に美しく思つた。頽廢した道德の復活のために、御互に小善の力行を心懸けようではないか。

(東京朝日新聞)

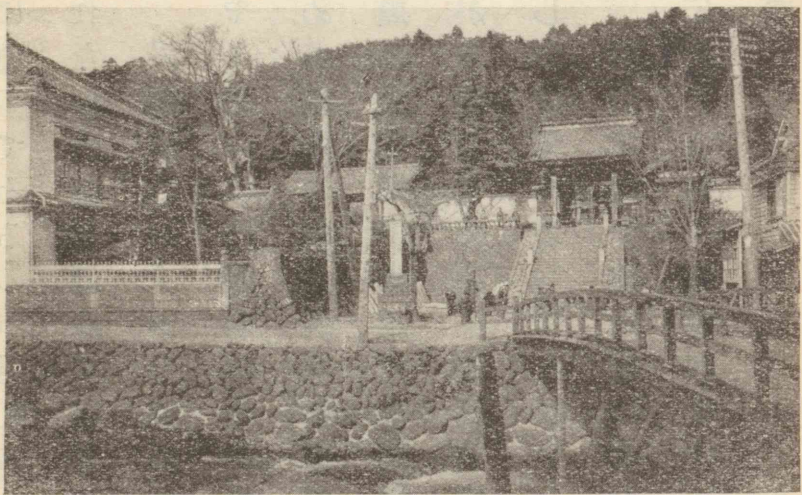
### 三七 修善寺行

まだ薄暗い間に眼がさめた。湯のなかからは田舎の客らしい男女の甲高い聲が絶えず聞えて來た。雨が降つてゐるのか、笕を傳うて流るゝ水が遠い鈴のやうな音を立ててゐる。

旅だと思つただけでも、神経のはしばしまでもくつろいだやうな氣がする。久しい間見失はれてゐた、ほんとうな自分の姿が見出されたやうな快さや、懐かしさや、痛々しさが、甘い涙を喚びさまして來る。

池の鯉が跳ねあがる音や、筒拔けた階下の湯のなかの笑

ひ聲が、靜かな雨の朝の空氣を掻き亂して傳はつて來る。  
 宿の男が氣を配りながら、そうツと戸を開けて行つた。  
 どんよりとした雨の空の鈍色が障子に反射して見える。  
 久しい間聽いたことのなかつた四十雀や、繡眼兒や、鶉や、駒  
 鳥や、鶯の聲が、直枕に近い樹立の中から流れて來る。長い  
 廊下を湯の方に歩いて行くと、そこで見知らぬ旅人たちが  
 私を見ては「お早う」といふ、私もまた「お早う」といふ、何の不自  
 然な感じを抱かないで。  
 旅では大抵の人が善人の心になつてゐる。都會では自  
 然の壓迫から、經濟上の自然の要求から、人は無理にも自分  
 を殺して、惡漢の仲間入りをしてゐる、冷酷な人間となつて



三七 修善寺行

ゐる。それが一度旅に出る  
 と不自然な要求から遁れる  
 と同時に、彼等はほんたうな  
 自分に立ちかへつてゐる。  
 修 魂を害はれてゐない善人の  
 群にはいつて行く時、私たち  
 自身も善人の心を喚起せず  
 寺 には居られない。

湯から上つて欄干に立つ  
 と、霧につままれた春の山が  
 桂川を隔てて、湯の町の屋根

に迫つてゐるのが見える。修禪寺の本堂を廻つて雨に濡れた櫻が白く煙つて見える。

岩燕であらうか。翅の眞つ黒な、そして普通の燕よりはやゝ肥つた恰好の小鳥が、桂川の瀬をなした水の上をかすめて翔んでゐる。その聲が千鳥に似て優しく、痛々しい。黒い大きな岩の上にも、屋根の上にも、鶺鴒が雨に打たれながら宿つてゐる。鶺鴒の唄も寂しい、細い雨の絹にふさはしい聲である。

東京を發つ時二冊の本を持つて出たのであつたが、私はどうしても本を讀む氣にはなれない。本を讀む機會は何處でも見出さるゝけれども、このやうな落ち着いた心で自然そのものの中に浸つてゐる機會は、めつたに見出せるものでない。本を讀むために少しでも自然から眼を離すのは、惜しいやうに思はれてならぬ。

昨日この町に來る途中でもさうであつた。私はバスケットのなかから本を出しは出して見たが、一行も讀むことはできなかつた。一年中、地下室の生活見たいな生活をしてゐる私には、太陽の光の直下に照らされてゐる自然を見ることが、心の躍るほどな驚異であつた。

新しく掘りかへされた土の上にも、松林の間にちらほら見えてゐる桃の畑にも、草につゝまれた草葺き屋根の水車小屋の上にも、白い燕子花にも、黄色な辛子菜の花の上にも、

丘阜の上にも、生れたまゝの自然の輝きが湛へられてゐた。午後になつて雨が止んだ。小高い雑木林の小徑を歩いてゐると、木の隙間からは天城や十國峠や、少女峠がなだらかな傾斜をなして連なつてゐるのが見える。修善寺の鐘の音が、静かな山の隅々までも餘韻を傳へて顫へてゐる。麥畑を圍んだ疎林からは小鳥の聲が止まぬ。櫟林を通り抜けて、水車小屋の三つばかり列んだ小川の傍に来ると一面にチューリップの咲いた花畑がある。そこから範頼の墓はすぐであるが、日が暮れかゝつて來たので桂川に沿うて町の方に歸つて行く。去年の冬來た時、見知つた犬が、やはり同じ家の前にゐて、尾を掉つて來たが、何もやるものを

\*名は源次郎  
早稲大田學講師

持たなかつたので頭を撫でてやつた。桂川のところまで跟いて來て橋の上で茶畑の方へ駈けて行つた。

\*吉田絃二郎

# 女子新讀本 卷二終

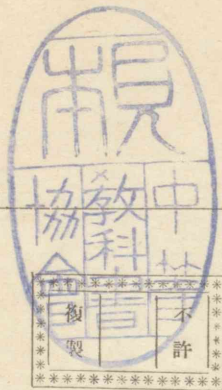
大正十五年七月十五日  
 大正十五年十月十二日  
 大正十五年十月十二日  
 印刷 訂正 再版 發行

## 女子新讀本

定價  
 卷一、二、三、四各金四拾貳錢  
 卷五、六、七、八各金參拾八錢  
 卷九、十 各金參拾七錢

## 昭和三年度臨時

定價  
 卷一、二、三、四 金七拾錢  
 卷五、六、七、八 金六拾參錢  
 卷九、十 金六拾參錢



著者	久松 潜一
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤 正 叟
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋 郁

(三印局株式會社印刷)

## 發行所

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地  
 振替口座東京二九五〇七番

至 文 堂  
 電話青山一三四五六番  
 四三四三番

弊堂發行ノ教科書ハ供給差支無キ様常に澤山製本出來準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます



玉文堂